

関係類型学と内容類型学

—— A. E. キブリク と G. A. クリモフ ——

石田 修一

はじめに

G.A.クリモフ (1928-1997) と A.E.キブリク (1939-) は、共にロシアの言語学者である。キブリクはカフカース諸語、とりわけナフ・ダゲスタン諸語関係の専門家であり、現在活躍中の言語学者である。一方、2013 年になってクリモフ追悼記念論集「言語史・類型学・カフカース学」が上梓されたが¹、ここに掲載された諸論文は、クリモフあるいは内容類型学の伝統を守り継承しようとする研究者が今なお新生ロシアにおいても健在であることを示唆している。両者は、概ね現代の言語類型学の二大潮流—内容類型学と関係類型学—を代表すると思われる。したがって、ここでは今日の類型学の二つの典型、シンボルとして両者の名を掲げている。また、関係類型学あるいは関係文法は、主として欧米や我が国の類型学の主流を形成していると思われるが、これは現代ロシアにおいてもむしろ有力な類型学潮流であると思われ、キブリクの諸研究は正にそれを代表するものである。両者は先ず互いにその論点、主張について認識しておく必要があると考えるが、ロシアはともかく少なくともわが国の現状（恐らく欧米も）はそうならないと思われる。本稿の執筆動機はこの点にある。ここでは、キブリクとクリモフを象徴として関係類型学と内容類型学の差異あるいは接点について考えて見たい。

I. キブリクの関係類型学

命題の述語と項 (arguments) の関係のあり方に専ら注意を集中して類型を決定し記述する一項のコード化特性（形態的特性）といわゆる統語テスト（統語特性）から類型を決定する一類型論をいまここで一括化して関係類型学 (relational typology) あるいは関係文法 (relational grammar) と呼称するならば、キブリクの類型論は正にここに属する。これは主として欧米を源流とするから、我が国の類型論にとっても馴染みの深

¹ Российская Академия Наук - «История языка, Типология, Кавказоведение», Наука, Москва, 2013; これは主として 2004 年秋にロシア科学アカデミー (РАН[RAN]) の社会科学学術情報研究所 (ИНИОН[INION]) でステパーノフ (Ju.S.Stepanov) やアレクセーエフ (M.E.Alekseev) 他が組織して開催された「クリモフ追悼講座」学会資料を基礎にした 15 篇の論文集である（同論集のために新しく追加された論文も含まれている）。

い類型論と思われる²。ただし、キブリクの場合、subject と object を統語的素因子 (syntactic primitive) とするポスタル (P.Postal)、パールムッター (D.Perlmutter) 等が提起した関係文法あるいはディクソン (R.M.W.Dixon) やコムリー (B.Comrie) 等の A, P (あるいは O), S を素因子として記述する類型論とは異なって、何よりも先ず意味役割、機能、語用という多次元的な項の性格を重層的に分類する言語類型を提起する点に特徴があろう。同氏の主要な論点は、同氏が様々な時期に様々な研究誌等に発表した多数の諸論文をまとめて収録あるいは加筆した主著 ①「言語学の一般的、応用的諸問題概説」(モスクワ大学出版所, Moscow, 1992, 335pp)、②「言語の定数と変数」(Aletheia 出版社, Sankt-Petersburg, 2003, 719pp) に現れている³。また、次は同氏の観点を最も集約的に表明した英文論文「主語・目的語を越えてー包括的関係類型学のために」(1997) である (cf. 同論文は露訳されて上の②第 10 章に収録されている) :

Contrary to common assumptions, syntactic relations, espically those of subject and object, are not universal, but are one of possibilities of organising relational clause structure. The three main dimensions of relational structuring are those of semantic roles, information flow, and deictic anchoring. There are three major language types depending on the extent to which these dimensions are grammaticalised: “pivotless” languages, with no or little grammaticalisation of any of these dimensions; “pure” languages, strongly grammaticalising only one of them, especially that of roles; “mixed” languages, strongly grammaticalising more than one. Genuinely syntactic relations, further differentiated in terms of their alignments (such as accusative, ergative, active, tripartite), then result from the cumulative encoding of role and flow distinctions in the mixed type.⁴

² Cf.: 1986 年日本言語学会シンポジウム『能格性をめぐって』を記録した『言語研究』(1986, v.90) に掲載の諸論文、特に柴谷方良「能格性をめぐる諸問題」、松本克己「能格性に関する若干の普遍特性」; また角田大作「能格言語と対格言語におけるトピック性」や松本克己著『世界言語への視座ー歴史言語学と言語類型論』(三省堂, 2006) 第 10 章「主語について」、第 11 章「主語のない文法モデル」、第 13 章「類型論から見た主語現象」、等。

³ ① *A.E.Кибрик* - «Очерки по общим и прикладным вопросам языкознания», Изд. Мос. Ун, 1992

② *A.E.Кибрик* - «Константы и переменные языка», Алетеия, 2003 ; なお、ここで採りあげるアレクサンドル・キブリク Aleksandr Evgenjevič Kibrik の他、90 年代に入って言語学者アンドレイ・キブリク (Andrej Akeksandrovič Kibrik) も加わって親子で活躍中。

A.E.Kibrik は処々で A.A.Kibrik の諸研究を引用文献としてとりあげている。

⁴ *A.E.Kibrik*, “Beyond subject and object: Toward a comprehensive relational grammar”

キブリクによる諸論は英文で発表されたものが比較的多数であるため、これもまた恐らく我が国の類型学研究者には入手し易くすでに馴染みの文献であるかもしれないが、以下では上記露文著書よりあらためて同氏の主要な論点を整理しておく[Кибрик, 2003, 109-187]。

統語関係の普遍性に関するアプリオリな見解は、SAE (Standard Average European 標準ヨーロッパ語) を基礎とした、いわゆる関係の階層 (relational hierarchy) — SU(bject) > D(irect) O(bject) > I(ndirect) O(bject) > O(blique) O(bject) — において最もprestigeの高い統語的位置たる主語関係を想定しているのであるから、それは結局主語の普遍性論に帰結する。確かに、印欧諸語には主語概念を支える多数の形態的、統語的根拠が存在する。主語の存在証明として、例えば形態面では、主語には他の名詞グループ (NG) とは異なる特別なコード化手段 (例えば格、補助語あるいは小辞等) があり — 関係の階層に従って構造的マーキングを増加させるという原則があり、階層ランクが低いほどそのコード化は多数の音素材を必要とするから、主語は無徴格 (主格) としてコード化されるのが普通である —、また動詞形態には主語をコントローラーとする一致 (呼応) 手段がある一方、統語面では、統語テスト (relativization, complementation, reflexivization, 等位接続、受動化等) において常にコントローラーあるいはターゲットとなるのは主語である、等。そして、形態特性と統語特性にズレがある場合優先的診断力をもつのはこの統語特性であることは、多くの研究者の共通認識となっている。現代の多くの統語理論とりわけ生成文法や関係文法理論もこれらの前提に立っている。

一方、ポスタルやパールムッターの関係文法、キーナン (E.L. Keenan) による主語の「多因子的」定義、主語の標準的特性として Actor と Topic の混在を示したシャフター (P. Schachter) の研究、主語と名詞グループの役割的 (role) 性質と指示的 (referential) の関係を分析したリー (Li Charles) とトンプソン (S. Thompson)、フォリー (W. Foley) とヴァン・ヴァリン (R. Van Valin) 等々の諸研究を通じて明らかになって来たことは、「関係の統語概念の普遍性に関するテーゼはかなり不安定である」[Кибрик, 1992, 183] こと、また主語には Agens という役割的意義、テーマや既知情報というコミュニケーション

(Linguistic Typology, vol.1, №3, 1997, Mouton de Gruyter) 論文の“Abstract”からの引用 (上にいう露訳にはこの Abstract はない)。

ョン上の意義、有生性や人間という存在論的 (ontological) 意義、人称 (I, you) の指示的 (deictic) な意義、指示的 (referential) 意義 (指示的な意義の典型的な担い手は、例えば冠詞、指示詞、イントネーション他)、また感情移入 (empathy) の焦点 (focus) の表示、等に相關していること、である [cf. Кибрик, 1992, 184-186; 2003, 110, 120]⁵。

確かに、「主語が様々な統語的プロセスに関与することは主語の客観的実在の最も本質的な論拠であり、また主語のランクの性質の証明である」[Кибрик, 2003, 122] が、近年の統語関係の性質に関する諸研究と諸言語の資料の蓄積から判明したことは、この前提が無条件・自明の理ではないことが明らかになって来た。主語を頂点とした統語関係の重要性は絶対的ではなく相対的なものである。上のように、「主語は、より基本的な意義とりわけ役割的な、またコミュニケーション上の、認知分野のあり得べき組合せの累加的な表現の手段である。主語は異なる認知分野の意義を様々な組み合わせた一体的な基準的『パッキング』として多因子的に定義される限りにおいて、これらの組合せは、第一には、同一言語の各種の文において異なることもあり得るし、第二に、主語は異なる諸言語毎にこれら諸意義の種々の組合せを文法化し得るのである」[Кибрик, 2003, 121]。

以上に関連して、一般的に主格 (対格) 言語である SAE にとって特徴的な統語的プロセス (手順) の大部分は、一つのコード化技法の中に上述の役割的意義以外の様々な意義を融合させようとする統語的融合化現象に特徴があるのに対して、主格 (対格) 言語とは異なる能格言語等異類型諸言語は、意味役割的要素を直接的にコード化して、統語的融合化法を採らない傾向、すなわち統語的膠着化技法の傾向がある。要するに、SAE では共演項の表層的形式化はその意味役割に合せて実現されるのではなく、意味役割等を凝縮して Subject-Object の枠組みにはめ込むのである。すなわち、能格言語と対格言語の違いは Subject-Object 関係の表現特性にあるのではなく、対格言語にはこの関係があるのに、意味に直結する能格言語ではこの関係を避ける傾向がある [Cf. Кибрик, 1992, 203-204, 205-206]。

具体例に移ろう。キブリクが SAD (標準ダゲスタン諸語 [北東カフカス]) の一例とし

⁵ Cf.: 主語が様々な意義を累加的に融合していることは、わが国の言語研究者の間でもすでに共通認識であると思われる。Cf. 松本克己著「世界言語への視座—歴史言語学と言語類型論」、三省堂, 2006, p.257, 265 では、SAE の主語には、主題、主格、動作主 (あるいは主役) の三つのカテゴリーが融合している、「SAE では、意味機能と談話機能が主語、目的語という文法関係の影に隠れて、ほとんど見えなくなっている。この意味で SAE は圧倒的に『統語的優位』の言語といつてよいであろう」、と説く。

て挙げる次のツェフル語（能格言語）例では、Factitive (Absolutive) ⁶は主格 (nom)、Agens は能格 (erg)、Experiencer は所格 (loc)（通常は与格 dat）、Recipient は与格 (dat)、また Stimulus-Factitive は主格 (nom) で表す、というように、意味役割毎に別々のコード化を行う：

少年 (nom)・死んだ

少年-es (erg)・少女 (nom)・殴った (побил)

少年-jle (loc)・少女 (nom)・見[え]た

少年-es (erg)・少女-s (dat)・殴った (ударил)

SAE ではこれらの役割は統語的圧力によって圧縮、融合されてしまう（「少年」は Subject に、「少女」は Object に）[Cf. Кибрик, 1992, 206-207]⁷。

ディアテシスについて言えば、SAE では統語原則に従って意味役割から独立した、文法化された Subject が用いられる、すなわち態 (voice) は意味関係の脱役割的意味化へ向けた操作を意味するが、SAD では態の変換は観られない。共演項の格マーカの取り換えは可能であるが、それは統語的変換ではなく、その共演項の意味役割の変更にすぎない。次はラク語（北東ダゲスタン諸語）の例である[Кибрик, 1992, 208]：

彼 (erg)・泥棒 (nom)・殺した

彼-ša (abl)・泥棒 (nom)・殺した（彼は～たまたま殺してしまった）

この「彼」は Agens の基本特徴をもたない限り能格によるコード化は不可である。したがって、格の付け替えは、意味的派生であって統語的派生ではない。こうした振る舞いの言語をキブリクは、統語的な (syntactically) 能格言語に対して意味的な (semantically) 能格言語と呼んでいる（これについては後述）。

次も意味的な能格言語ベジタ語（ツェズ諸語に属する一北東ダゲスタン諸語）のいわゆる逆受身 (Antipassive) の例である[Кибрик, 1992, 209; 2003, 612-613]：

兄 (弟)・ti (erg)・水 (nom)・沸かす (Брат воду кипятит)

兄 (弟) (nom)・水-d (inst)・沸かす (antipassive 形) (Брат занимается кипячением)

⁶ キブリクは1992年著書(①)では Factitive という用語を、2003年著書(②)では Absolutive という用語に置き換えている。これについては註 17 参照。

⁷ 二種の「殴る」動詞は、行為の対象への波及度、つまり共演項の、行為への巻き込まれ程度、の差異を表し、最初の文では「少女」は Patients、最後の文では Recipient だという。

воды)

この場合の逆受身では、行為は *Agens* の恒常的特徴として観念され、*Patiens* は個別・具体的な対象ではなく、一定の対象類を表すという（そのため、その名詞は欠落することが多い；例えば *He smokes, but doesn't drink* のように）⁸。したがって、ここでは逆受身文は「湯沸しに携っている/ ボイラーマンだ」のような意味をもつと思われる。逆受身と言え、その典型として我が国では恐らく能格言語ディルバル語（オーストラリア諸語）等が想起されるのであろうが、上はカフカースの言語にはよく見られる逆受身であり、ベジタ語は意味的な（*semantically*）能格言語なのである。一方、ディルバル語の場合は、語用上の圧力に押されて統語的な（*syntactically*）能格言語へ向って移行しつつあることになる。

主語性という統語的基準の面で中立的な能格言語の例として、ダゲスタン諸語（北東カフカース諸語）のチャマル語の例がある [Кибрик, 2003. 137-138] :

- a. *wac-ud* *jac* *č'in.*
 兄弟 *ERG* 姉妹 *NOM* 殴る *PAST*
 「兄が妹を殴った」 (*Брат побил сестру*)
- b. *wac-la_i* *s* [*Ø_i* *jac* *č'i:na*]*s* *idalaq* *ik'.*
 兄弟 *DAT* ***ERG*** 姉妹 *NOM* 殴る *INF* 欲する *NEG*
 「兄は妹を殴りたくない」 (*Брат не хочет бить сестру*)
- c. *jac-la_i* *s* [*wac-ud* *Ø_i* *č'i:na*]*s* *idalaq* *ik'.*
 姉妹 *DAT* 兄弟 *ERG* ***NOM*** 殴る *INF* 欲する *NEG*
 「妹は兄が妹を殴ることを欲しない (妹は兄に殴られたくない) 」
 (*Сестра не хочет быть побитой братом*)

⁸ 「大多数の場合、逆受身では *Patiens* は欠落するか、それを置く場合も非指示的に、すなわち個別化された対象ではなく、一定の対象類の意味で使われる。具体・指示的 *Patiens* (固有名詞、人称代名詞) の使用は無条件に不可であることやこの位置では複数形名詞の使用が頻繁であることも、このことに関連する」として次の例を挙げる [Кибрик, 2003, 612-613] :

a) **is*(brother/ nom) *χori-d*(ram/ instr) *ũχo-la:-c*(cut/ Antipass),

b) *is*(brother/ nom) *χor-lara-d*(rams/ pl, instr) *ũχo-la:-c*(cut/ Antipass)

「こうして、ベジタ語の逆受身化は作因動詞 (能格動詞 *agentive verb*) を一項動詞に変える—*Agens* は *S* 共演項に、*Patiens* は周辺項に転ずる—一語形成過程と見なすべきである。この過程は、作因動詞 (能格動詞) を産み出す使役化に対置される」 [Ibid].

上は、主文（母胎文）a.「兄（弟）は[dat]・Xを・欲しない（～したくない）」、b.「（姉）妹は・Xを・欲しない」のXに「兄（弟）が[erg]・（姉）妹を[nom]・殴る」の文を埋め込む場合の同一名詞句削除の態様を示している。点線が示すように、Agens の削除（b）も Patiens の削除（c）も可能である。

次は主格も能格も再帰化のコントローラーになり得ることを示すダルギン語（北東カフカース諸語）イツァリン方言の例[Ки́брик, 2003. 138]：

- a. muša-li cin·nai ca·wi gap'irq'aca=w
 ムサ **ERG** REFL·GEN REFL·NOM=I 誉める PRES=I
- b. musa_i cin·nai cin·ni_i gap'irq'aca=w
 ムサ **NOM** REFL·GEN REFL·**ERG** 誉める PRES=I
- 「ムサが自分自身を誉める（自慢する）」（Муса хвалит себя）[a=b]

a では Agens である「ムサ」（erg）が Patiens—再帰代名詞「自分自身」（nom）—をコントロールするのに対して、b では Factitive である「ムサ」（nom）が Agens（再帰代名詞 erg）をコントロールしている。「共演項の再帰化のこうした技法は意味的能格性現象の一貫した表現であり、その場合共演項は如何なる統語的優先権も具有していない」[Ки́брик, 1992. 212]。

こうして、Subject-Object 関係（統語関係）は、様々な意義要素を積み重ね融合する手法が文法化されている場合だけであり、以上諸例のような意味役割的な能格言語は統語的構造に対して中立的だ、というのである。「一つの言語形式に役割的特性と語用的特性を貼り付けることは、必然的に当該形式の役割的動機性を弱化させることに繋がる。当該形式が意味的な同質性を失って形式化されてしまい、その結果、当該形式は役割的的定位性や語用的定位性に合せるだけでなく、様々な統語規則、例えば、名詞グループの同一指示的削除、等位接続的短縮、関係節化、再帰化等の適用時の構成と条件の中で現れるようになる。主語が構文化に形式的な制約を負わせると途端に、これらの制約を乗り越える手段を作り出す必要性が起って来る。最もラディカルな手法が他の意味役割をもつ名詞を主語の位置に動かす態（voice）変形の形成である」。そこで「意味的本質としてではなく、統語的本質としての主語の名称」が現れるようになる[Ки́брик, 1992, 196]。しかし、こうした「主語の本質の理解を基にすれば、諸言語は、他の共演項（Actant）に比して高次ランクの共演項がどの程度明確に分離されるか、またこの共演項がどの程

度アクティブに統語的プロセスに関与するか、という点での相異である。しかも、名詞共演項のランク関係を決定するような、名詞共演項の正にこうした『累加的』コード化の、必然性を証明するものは何もない。かつまた、諸言語は様々な認知的分野に照準を合せてその諸分野の様々な諸意義を文法化し得るのである」[Кибрик, 2003, 122]。

動詞共演項の役割的意味に極めて敏感に反応するのは、活格言語も同じであるとしてタバサラン語（ダゲスタン諸語・北東カフカス）の例が挙げられる。例えば、「落ちる、倒れる」型動詞の唯一共演項は *Patiens* 的にも *Agens* 的にも解釈され—可動図式 *подвижная схема*[*mobile scheme*]—、その解釈次第で別々のコード化が用いられる[A.E.Кибрик, 2003, 131-132]：

aqun-zu // aqun-vu 「私//君が偶然倒れた」(-zu=1/sg/*Patiens* ; -vu=2/sg/*Patiens*)

aqun-za / aqun-va 「私//君が意図的に倒れた」(-za=1/sg/*Agens* ; -va=2/sg/*Agens*)

cf. rurč₀un-za(-vu) 「私が君を殴った」

rurč₀un-va 「君が私を殴った」(cf. -zu 指標による *Patiens* との一致呼応を遮断[block]する規則)⁹

以上の主旨から、キブリクは先ず統語関係のある言語と統語関係を欠く言語（意味的な言語）を区別する。後者には上の諸例の意味的な能格言語、活格構造言語以外にも、中立構造言語例えばインドネシアのリアウ語が挙げられる[Кибрик, 2003, 140]：

- | | | | |
|----|---------------------------------|-------------------------|-------------|
| a. | david | takot | saya |
| | ダヴィド | бояться[fear, frighten] | 1sg. |
| | 「君は（逐語的には、ダヴィドは）私を怖がらせた」 | | |
| | (Ты [букв. Давид] испугал меня) | | |
| b. | saya | takot | mi |
| | 1sg | бояться[fear, frighten] | тот それ(その人) |

⁹ ただし、普通は活性 (active) 指標あるいは不活性 (inactive) 指標の区分は共演項の役割的意味に固定している（固定図 (жесткая схема)）。例えば、活格構造を用いるカマユラ語（ブラジルのトゥピ・グワラニ語族）では、不活性的な共演項をもつ幾つかの自動詞（「死ぬ *умирать*」「恐れる、が怖い *бояться*」「落ちる、倒れる *падать*」のような動詞）がその共演項を活性項としてコード化する。さらには、自動詞の意味役割との規則的な相関性がない活格的コード化図式をもつ言語がある（例えばヤグア語—ペルーのジェ・パノ・カリブ語族）[A.E.Кибрик, 1992, 132]。

「私はそれ[その人]を怖がる (それ[その人]が怖い) (Я боюсь этого)

c. masok putih, masok putih, masok putih
 入る 白い 入る 白い 入る 白い

(ビリヤードをするとき)「白が入った、白が入った、白が入った」

([играя в бильярд] Белый вошел, белый вошел, белый вошел)

d. gidi saya kuning lagi
 歯 1sg 黄色い CONJ

「私の歯はいまだに黄色い」 (Мои зубы все еще желтые)

キブリクは、上の a,b 例は二項動詞では *experiencer* と *stimulus* の語順が逆であり、一
 項動詞の c, d 例でも語順が逆で、また統語的地位も形態的指標も存在しない、と解説す
 る。ただし、中核的統語関係（主語、直接補語、間接補語）が欠落する言語にあっても、
 「中核項（中心項 *ядерный аргумент* [core argument]) と周辺項 (*периферийный*
arg.[peripheral arg.. *circonstant*]) の重要な対立は存在」し、「正にこの中核項（中心
 項）こそ述語の他動性程度を決定する。ここで扱う本来の統語関係とは、この中心項を
 述語に結び付ける関係である」。リアウ語もそうした例の一つとして挙げられている
 [Кибрик, 2003, 140-141; cf. Кибрик, 1992, 199-201]。

そこで、一般に述語と項という関係構造の中で、何が記号化 (*symbolize*) されるの
 か、またそれが如何なる記号的 (*semiotic*) 手段でつまりどのように記号化されるのか、
 という点をあらためて問い直している[Кибрик, 2003, 141-142]。単に A, P(あるいは O),
 S(subject)の項と述語という関係構造とは異なった基礎的概念装置の再検討である。

1. 何が記号化されるのか。それは様々な意味的要素 (*семантические измерения*
 [semantic dimensions]) である。上述のように、項 (名詞グループ) に張り付けられる
 意味的諸要素 (*семантические измерения* [semantic dimensions]) の中には指示的要
 素、モーダルな要素、情緒的要素、発話内行為 (*illocutionary*) 要素、等々も存在する
 が、文法化の面から見てこれら諸要素の中で最も直接的で重要な意味的要素は、役割的
 な要素 (*role dimensions*)、コミュニケーション的要素 (*communicative d.*)、直示的要
 素 (*deictic d.*)、すなわち文法化された意味的要素 (*grammaticalized semantic d.*) で
 ある。さらにまた、これら諸要素間には、その相対的な重要度を支配する語用・統計上
 の一般的傾向、すなわち意味的諸要素の階層性がある。それは、以下の通りである：

役割的要素 > コミュニケーション要素 > 直示的要素 > その他諸要素¹⁰。
これは名詞グループ (NG) の意味的カテゴリー化にとってその相対的な機能的重要性に対応した階層である。役割的要素はどんな命題の意味にも存在する必須的要素であり、したがって必ずどの NG にも帰属される要素であるのに対して、コミュニケーション的カテゴリー化は命題そのものの意味に発する要素ではなく、談話上の位置や話し手による選択次第の要素であるから、より必須性が劣る、また直示的要素は事象の参与者 (locutor・unlocutor) の性質に発するものであるから、限られた場での発話にのみ関与する、というように、諸要素間の比重は自ずと異なる。

この文法化された意味的諸要素すなわち「文法化された認知的分野」を文法軸 (грамматическая ось [grammatical pivot]) と呼称すると、軸数の観点から見て、無軸 (безосевый) 言語、単一軸 (одноосевый) 言語、多軸 (многоосевый) 言語の言語タイプが区別できる¹¹。無軸言語とは、例えばロシア語 Mat'(mother) ljubit(likes) doč'(daughter)のケースをイメージすればよい(「母」と「娘」は形態上主・対格同形—homonymy—である上、ロシア語では「母」と「娘」を入れ替える自由語順が許容されるから文脈の外では役割識別が困難となる)。そして、キブリクは上のリアウ語を無軸言語に分類している。次に、単一軸言語は一つの文法軸だけの言語である。また、上の階層性は、何れかの構成要素が文法化される場合、その構成要素より左側にある構成要素は全て文法化されることを意味する。したがって、単一軸言語は、純理論的には役割性定位(役割的)言語、コミュニケーション定位(コミュニケーション的)言語、直示性定位(直示的)言語が考えられるが、上の階層性が単一軸言語のタイプに制約を負わせるため、最も確度が高い単一軸言語は役割的要素をカテゴリー化する言語すなわち役割的単一軸言語であることを示唆している。上掲の能格言語諸例は、概ね役割的言語であることになろう。最後に、多軸言語は、一つ以上の認知的分野を文法化する言語タイプである。これもまた上述の階層性に従って四タイプ(コミュニケーション的・役割的言語、直示的・役割的言語、直示的・コミュニケーション的・役割的言語、直示的・コミ

¹⁰ 様々な「意味的諸要素」(семантические измерения [semantic dimensions]) についてのより詳しい解説については cf. A.E.Кибрик, 1992, 184-186 (ここでは、「意味的表象諸要素」компоненты семантического представления [components of semantic representation]という用語が使われている); cf. A.E.Кибрик, 2003, 149-151, cf. 141-142

¹¹ キブリクは、「軸」という用語に相当する英語の pivot は、自身の用語法では、「諸言語に分離される文法化された概念としての意味的諸要素のこと」であり、統語的性質において中心的なものを呼称するディクソンやヴァン・ヴァリンにおける pivot の概念とは異なる、と断っている (A.E.Кибрик, 2003, 151)

ユニケーション的言語)が考えられるが、最も確度が高いタイプは、コミュニケーション的・役割的言語と直示的・コミュニケーション的・役割的言語であるという。ただし、キブリクは次のように付言している:「純『単一軸』言語の概念は現実の場の単純化であることに留意しておくべきである。言語が単一的な意味役割概念のコード化だけに定位するケースは、実際言語というよりはむしろ観念上の言語である。重要なことは、どんなパラメーターの文法化も段階的な性格を有するのであり、したがって軸尺目盛(осевая шкала [pivot scale])上の基準的単一言語からの離反度には、無限多数の段階が存在することである。(…[軸尺図]…)。多軸言語は様々な程度に様々な諸要素の様々な諸コンセプトに定位させており、そのことは多軸言語に無限の変異性を引き起す。人間言語の絶対多数は多軸的であるという様相が言語の現実である」[Кибрик, 2003, 152]¹²。

2. 次に、以上の意味諸要素(軸)は、どのようにシンボル化(コード化)されるのか。形態的類型分類からのアナロジーを利用すれば、コード化手段の欠落した孤立的技法、一つの形式に一つの意義要素を貼り付ける膠着的技法、一つの形式にいくつかの意義要素を積み重ね混ぜ合せてしまう融合的技法の三つの手法が考えられる。換言すれば、ゼロ技法(中立的技法 *zero/ neutral strategy*)、分離的技法(*separative s.*)、累加的技法(*cumulative s.*)であるという。軸数とコード化技法から見て、無軸言語は中立的技法を意味し、上のリアウ語はそれを代表する。また、分離的技法とは、例えばコミュニケーション要素と役割的要素をそれぞれ別々の名詞項に分離(独立)して貼り付ける言語である(例は後述)。累加的技法とは、既述のようなSAE言語が典型である。すなわち、「異なる認知分野の意義の文法化は、互いに独立してあるいは累加的に実現され得る。異なる軸の概念の正に累加的パッキングこそ、名詞的文成分の形成に、とりわけ主語の出現に至らしめるのである。主語は、本質的に諸ハイパーロールのさらなる一般化である」[Кибрик, 2003, 124];「主語による統語関係は、一つの形(すなわち主語)が同時にNGの種々の関与的特徴をシンボル化する場合の、累加的コード化技法の典型的なケースであることは明らかである」[Кибрик, 2003, 151]¹³。さらに、分離的技法と累加的技法は二極に峻別されるのではなく、この両極間の累加性目盛(*cumulativeness scale*)上に多数の言語が連続的に配置される。

¹² 左端を起点とする単一軸言語から右端の多軸言語へ向う「軸尺」直線が示されている。

¹³ なお、孤立的技法、膠着的技法、融合的技法という用語はブランクからの借用であるという: cf. *F. Plank, Ergativity, syntactic typology and universal grammar: Some past and present viewpoints// F. Plank(ed.) 1979: 3-36*

3. 次は、上記の意味要素の階層性の中で最高ランクにある役割的要素 (role dimensions) の検討である。キブリクは、ギヴォンの定義を引用しながら、二項動詞の中核項の最も重要な基底的、本源的な役割は他動の *Agens* と他動の *Patiens* すなわちギヴォンの (salient) cause と (salient) effect であり、これがプロトタイプの他動性図式を形成する、と説く [Кибрик, 2003, 142-143]¹⁴ :

AGENS: «The prototypical transitive clause involves a volitional, controlling, actively initiating agent who is responsible for the event, thus is its salient cause»

PATIENS: «The prototypical transitive clause involves a non-volitional, inactive non-controlling patient who registers the event's change-of-state, thus is salient effect»

「提示する、事象とその中核的参与項の自然言語的カテゴリー化手法は、人間の認知構造ではどんな事象も全て、二つの参与項—他動の *Agens* と他動の *Patiens*—を伴うプロトタイプの事象への近接度 (подобие [likeness]) を基礎として、プロトタイプ的中心から放射状にカテゴリー化される」 [Кибрик, 2003, 143-144]。キブリクは、一項動詞の S(subject)共演項を立てない。二項動詞のプロトタイプの二つの共演項 (*Agens* と *Patiens*) の「換喩的」(metonymical) 拡張であるハイパーロール (гиперроль [hyperrolle]) によって一項動詞の共演項を説明し、また全ての諸類型 (キブリクは、活格型、能格型、対格型の他、三分立型、中立型の諸類型を立てる) のメカニズムを説明する。すなわち、ハイパーロールは、プロトタイプ役割項への近接度、隣接度から「換喩的 (メトニミー的)」に拡張されて *Agens* に準ずる (агенсиоподобный [agens-like])、*Patiens* に準ずる (пациенсиоподобный [patients-like]) 役割項へ変換して行く過程を表している。例えば、「する、作る」、「殺す」等々の他動の *Agens* の観念は、「行く」、「跳ぶ」等々の一項動詞の共演項に換喩的に拡張される一方、「する、作る」等々の他動の *Patiens* の観念は「落ちる、倒れる」、「死ぬ」等々のような一項動詞の共演項へ換喩的に拡張された結果、プロトタイプはより相対化され一般化される。キブリクはこれを「一般化された (обобщенный [generalized]) *Agens* と *Patiens*」と呼んでいる。要するに拡張的 *Agens* であり、拡張的 *Patiens* = ハイパーロールである。この「一般化された」*Agens* と *Patiens*

¹⁴ T. Givon, The pragmatics of de-transitive voice: Functional and typological aspects of inversion // T. Givon(ed.) 1994, 4.

は、あらためて活格型言語にとってのプロトタイプとなる。ところが、他の意味役割をもつ多くの動詞「見(え)る」、「聞く(聞える)」、「怖れる(怖い)」、「凍える」タイプの動詞もあり、これらの意味役割はそれぞれの意味に従って様々に *Agens* や *Patiens* に統合されるから、活格言語のハイパーロールは、*Actor* (Актор) と *Undergoer* (Претерпевающий) として現れるという [Кибрик, 2003, 146]¹⁵。

ACTOR: 事象を遂行ないしは制御し、

この事象の存在に対して真っ先に責を負う事象参与項。

UNDERGOER: 事象を遂行せずかつ制御せず、

真っ先にこの事象の影響を被る事象参与項

次に、プロトタイプの *Agens* と *Patiens* をそれに近接する別の準アジェン斯的 (*Agens-like*)、準パティエンス的 (*Patiens-like*) な NG 項と共に *Agentive* と *Patientive* としてハイパーロール化する拡張ルートもある。例えば、*Agentive* には他動の *Agens* に加えて「見(え)る」、「聞く(聞こえる)」、「欲する(～したい)」のような動詞の *Experiencer* を、また *Patientive* にはこうした動詞の *Stimulus* を包括する拡張ルートである。さらに、これらとは別に、単一項には、「行く」、「跳ぶ」等々のような自動詞の *Agens* の他、「落ちる、倒れる」、「死ぬ」等々のような自動詞の *Patiens* を、また「怖れる(怖い)」「凍える」等々のような自動詞の *Experiencer* を統合する。これは *S(ole)*, *A(gentive)*, *P(atientive)* の三つのハイパーロールをもつ三分立構造言語であるという [Кибрик, 2003, 145-146]¹⁶。

AGENTIVE: 二つの中核的共演項を伴う事象の最も準作因/準 *Agens* 的
(Cause-/*Agens-like*) 参与項

PATIENTIVE: 中核的二共演項を伴う事象の最も準結果/準 *Patiens* 的

¹⁵ キブリク自身は、フォリーとヴァン・ヴァリンの用語法によると断っている (*W.A.Foley & R.D.Van Valin*, *Functional syntax and universal grammar*. Cambridge University Press, 1984, 29; *W.A.Foley*, *The conceptual basis of grammatical relations // W.Foley(ed.) The role of theory in language description*. Mouton de Gruyter, 1993, 139, 141)

¹⁶ キブリクは、一般に用いられる *A*, *P*, *S(subject)* を用いず、故意に *S(ole)* に替える、と注釈している。この意味での三つのハイパーロール的役割項 (*A.P.S*) をもつ言語は現実存在する、としており、例えば、ウディン語 (北東カフカス) では、「少なくとも形態的には、*Agentive* は能格、*Patientive* は与格、*Sole* は主格でコード化される」。その他このタイプの二、三の言語の名前が挙っており、アイヌ語も「部分的に」ここに属する、としている。

(Effect / Patiens-like) 参与項

SOLE: 事象の単一的 (Sole) 中核的共演項

対格構造や能格構造はどうか。キブリクによれば、これらは Principal と Absolutive のハイパーロールを基にしているが、これはそれぞれ Actor と Undergoer のハイパーロールの拡張である。すなわち能格言語は他動 Agens の拡張としての Agentive を、また Undergoer の拡張としての Absolutive (Factitive) をハイパーロールとし、対格 (主格) 言語は Actor の拡張としての Principal (Protagonist) を、また他動 Patiens の拡張としての Patientive をハイパーロールとする類型である [Кибрик, 2003, 147-148]¹⁷ :

PRINCIPAL: 事象の生起に対して真っ先に責を負う事象の主たる参与項。「主役」

ABSOLUTIVE: 事象の最も直接的な、最近接の事象参与項であり、最も事象に関りがあり、事象に引き込まれる参与項

以上に関連して: 「Actor と Principal の本質的な違いは、前者ハイパーロールの絶対的カテゴリー化と後者ハイパーロールの相対的カテゴリー化である。すなわち、事象に二つの参与項がある場合、Patiens-like な参与項に比べて明らかに Agens-like な参与項が事象の生起に対して真っ先に責を負う。ところが一参与項の場合は、その役割制の特徴

¹⁷ キブリクは上の 1992 年著書 (①) では、Absolutive ではなく Factitive を、Principal ではなく Protagonist という用語を使っていた。2003 年著書 (②) では、「Absolutive という用語の使用は、理論的に間違いだと考える」が、「Factitive という用語が文献で別の意義で使われているため」「先行の言語学の伝統に従う」、またアンドレイ・キブリク (子息) の提案によって、自分が「過去に使った Actor や Protagonist に代え」て Principal を使う、としている [Кибрик, 2003, 147] ; Factitive (Absolutive) の意義については、クリモフがキブリクから引用して「内容類型学の原理」(Principy kontensivnoj tipologii, Nauka, 1983, p.102, 111 他) で記述したことは、本稿筆者も「類型学研究」(2, 3 号) で紹介した。キブリクは、キーナン論文を参考にしながら、それに倣って、「場の直接的で最も影響を受ける参与者を表す共演項」として、具体例を紹介した [Кибрик, 1992, 192-193 ; E.L.Keenan, Semantic correlates of the ergative / absolutive distinction—Linguistics 22, 1984]。例えば、1) Factitive は、be cloudy と言えば weather、moo と言えば cow のように、述語の意義によって強力な制約が負わせられる項であること、2) Agens 項でなく Factitive 項に関連してこそ初めて述語の意味が明確化すること (述語の意味は Factitive 次第であること) : John cut his arm, cut the cake, cut his whiskey with water, cut the prices 等々、3) Factitive の存在は述語が表す行為から独立して存在し得ない (Agens は、場とは独立して存在し得る) こと : He committed a crime, made a mistake, took a walk, told a lie、等々多数例が挙げられる。すなわち Factitive 項は、Agens 項と比べて意味的に述語との相互間密着度が強く、そうであればこそ、第一次シntagマ (陳述核) の形成に与り、Agens 項はそこに被さる二次的な要素ということになる。

に関りなく暗黙の内にそれが真っ先に責を負うことになる。Principal 概念の相対的な性格が、一項動詞の Agens と Patiens の統合可能性を惹起する。同様に、Absolutive (Factitive) のハイパーロールは Undergoer のハイパーロールを基にした相対的な概念である」[Кибрик, 2003, 148]。キブリクの指摘に関連して付言すれば、Actor、Agentive と Undergoer、Patientive はそれぞれ、プロトタイプ Agens、プロトタイプ Patiens からの離反度、拡張度が小さいが、Principal や Absolutive (Factitive) はそれぞれ、プロトタイプ Agens やプロトタイプ Patines からの離反度、拡張度が大きい、ということになる。そこで、この離反度、拡張度が高い、つまり相対性が高い役割項 Principal が統語性優勢の主語 (Subject) へと収斂して行くことになる。最終的には、意味的役割の最大限拡張ハイパーロールは、中心 (core) と周縁 (periphery) にまで及ぶこととなる。そうした構想を示したのが、以下の図である。中核的共演項の最も重要な、本源的、基底的な意味役割である他動の Agens と他動の Patiens が連続的に拡張されて統語関係に収斂して行く過程を示している。「1-2a) 行が示す統語的対格言語では、主語 (подлежащее) は、他動の Agens の、Agens と Agentive の、Actor の、そして最終的には Principal の連続的拡張の結果である。統語的対格言語での起点 (基底) 的な直接補語は、4b) 行が示すように、Patientive の文法的表現である。3-4a) 行が示す統語的能格言語では、主語 (подлежащее) は、他動の Patiens の、Patiens と Patientive の、Undergoer と Absolutive の連続的拡張の結果である。2b) が示す統語的能格言語における基底 (起点) 的な第二中心共演項 (агентивное дополнение [Agentive 補語]) は Agentive の文法的表現である」[Кибрик, 2003, 169-171] :

	本源的役割		ハイパーロール				統語関係				
1	他 動	⇒	Agens	⇒	Actor	⇒	Principal	⇒	Subject	⇒	Core
2a	の	⇒	Agentive								
2b	Agens			⇒	⇒			⇒	Agent. Obj.	⇒	
3	他 動	⇒	Patiens	⇒	Undergoer	⇒	Absolutive	⇒	Subject	⇒	
4a	の	⇒	Patientive								
4b	Patiens			⇒	⇒			⇒	Direct Obj	⇒	

なお、類型とハイパーロールの関係図(「統語図式タイプ」)は、以下の通りである[Кибрик, 2003, 148] :

統語図式タイプ（型）

統語図式タイプ（型）	ハイパーロール
対格型	Principal, Patientive
能格型	Absolutive, Agentive
活格型	Actor, Undergoer
三分立型	Sole, Agentive, Patientive

以上のように、キブリクの類型構想は、概ね、意味的諸要素（semantic dimensions）が形成する軸（pivot）数とその組合せ、軸のコード化技法（孤立的＝中立的技法か膠着＝分離的技法か融合的＝累加的技法か）、役割軸分野での中核的共演項の意味役割（ハイパーロール）、という主として三つの変数（cf. 上の 1, 2, 3）の組合せの態様による多次元的な類型分類の提起である。ただし、これは「対格的、能格的、活格的技法による伝統的な分類と直交する。その場合、同一の統語タイプの言語が実際には多くの点で極めて多様であるという事実もまた、この全一的類型構想の中に説明を見出すべきである」、と[Кибрик, 2003, 141-142]。

キブリクが典型として挙げる諸言語の具体的分類とその典型例は概ね次のようなものである[cf. Кибрик, 2003, 163-182]¹⁸。一見して判るように、周知の対格、能格、活格言語タイプが単一軸型、多軸分離型、多軸累加型間に分散しており、これら各タイプが構造的に多様であるというキブリクの再三の主張の根拠となっている。なお、既述のように、キブリク構想によれば、累加型は、様々なハイパーロールをもつ役割的要素に加えてコミュニケーション要素、直示的要素等を融合累加して構造化する四タイプ（上述参照）が可能であり、その累加性が対格、能格、活格、三分立型と直交することが、統語的な言語タイプへの再編を促すのであるから、多軸累加型は本来的に統語的言語タイプなのである。加えて、その再編過程の中で統語法と形態法が「分裂」するから、さらに

¹⁸ リアウ（インドネシア）、ナヴァホ（北米/ ナ・デネ大語族）、アルチ（北東カフカス）、チャマルル（北東カフカス）、アチェ（イ）（オーストロネシア）、リス（タイ/ シナ・チベット）、アヴァピト（南米）、タガログ（フィリピン）、ツァフル（北東カフカス）、イイマス（ニューギニア/ パプア）、ディルバル（オーストラリア）、カバムパ（ン）ガン（中央フィリピン・ルソン島）、ハカルテク（グアテマラ/ マヤ語族）；その他、活格型形態法と対格的統語法をとるラコタ語（北米/ スー語族）、能格的形態法と対格的統語法をとるエンガ語（パプア・ニューギニア）、三分立統語法と能格的・対格的形態法をとるハカルテク語といういわゆる分裂型についても例を挙げている。

多様なタイプを展開することになる。以下の分類例は、キブリク自身が挙げているものではなく本稿筆者による覚書である¹⁹：

無軸言語 リアウ語

単一軸言語 ー役割（定位）言語 ー対格言語 ナヴァホ語

ー能格言語 アルチ語、チャマラル語、バスク語

ー活格言語 アチェ（イ）語

ー三分立言語

ーコミュニケーション（定位）言語 リス語

ー直示性（定位）言語 アヴァピト語

多軸言語 ー分離型ー コミュニケーション・役割言語 ー対格型 タガログ語

ー能格型 ツアフル語

ー活格型 アチェ（イ）語

ー三分立言語

ー 直示・コミュニケーション言語 イイマス語

ー 直示・コミュニケーション・役割言語

ー累加型 ー統語的能格言語 英語、ロシア語、等々

ー統語的能格言語 デイルバル語、カパムパ（ン）ガン語

ー統語的活格言語

ー統語的三分立言語 ハカルテク語

以下では、これらの内の典型例だけを取り出しておく。

単一軸言語 単一軸の役割言語の内、能格言語については上のチャマラル語を含めて既述の例のような意味的な能格言語の例によって概ねイメージを掴めるのではないか、と思われる。意味的な活格言語については、次のアチェ（イ）語例が挙げられる。ところが、同語に多軸分離型（コミュニケーション・役割言語）への発展を見る研究者（デュリー）も存在し、それによれば、動詞前位置に置かれる人称指標がトピック観念を表すという[Кибрик, 2003, 139, 162-163]²⁰：

¹⁹ Cf. 言語諸類型分類の総括表はキブリクを参照[Кибрик, 2003, 183]。

²⁰ M.Durie の研究による；必須接頭辞 (geu-) と任意接尾辞 (-geuh) の助けを借りて、「行く」と「倒れる」の単一共演項の意味役割を区別。二項動詞「支える」には同機能をもつ人

- a. **geu·jak** **gopnyan**
 彼(女)行く 彼(女)
 「彼(女)が行く」(Он(а) идет)
- b. **gopnyan** **rhet(·geuh)**
 彼(女) 倒れる(・彼[女])
 「彼(女)が倒れる」(Он(а) падает)
- c. **gopnyan** **geu·mat** **lōn**
 彼(女) 彼(女)・支える 私
 「彼(女)が私を支える」(Он(а) держит меня)

また、キブリクは「意味的な三分立言語の例は知らない」とし、立証された三分立型は歴史的移行段階を示唆する、という[Кибрик, 2003, 155]。単一軸の役割言語には意味的な対格言語は稀なはずである。その理由はすでに上した主語の性質に尽きている。それにもかかわらず、キブリク(アレクサンドル)はアンドレイ・キブリクの例によってナヴァホ語(北米大アサパスカ諸語集団の一)をここに所属させている[Кибрик, 2003, 153-154]。クリモフが同語を活格言語に算入することと対照的である²¹。また、単一軸のコミュニケーション(定位)言語に次のリス語があり、これは役割標示では中立的であるとされる[Кибрик, 2003, 157]；

- a. **Lathyu** **nya** **ána** **khùà.**
 人々 TOPIC 犬 殴打する
 「人々は、犬どもを殴打する/ 人々は、犬どもが殴打する」
 Люди – они бьют собак / Люди – их бьют собаки.
- b. **ána** **nya** **lathyu** **khùà.**
 犬 TOPIC 人々 殴打する
 「犬どもは、人々を殴打する/ 犬どもは、人々が殴打する」
 Собаки – они бьют людей / Собаки – их бьют люди.

称指標の二つの位置がある：接頭辞は意志をもつ(能動的 active) 参与項を指すのに対して、接尾辞は意志を欠いた(受動的 passive) 参与項を指す(接尾辞指標はいくつかのコンテキストでは表層レヴェルに存在しない)。

²¹ Cf. クリモフ『新しい言語類型学—活格構造言語とは何か』, 三省堂, 1999, p.112.他。

同語では、トピック NG は先頭の位置とトピック小辞 *nya* でマークされ、役割性については中立的である点で無軸言語に類似している。リーとトンプソン等は、これをトピック卓立言語 (topic-prominent language) [Li & Thompson]²²と呼んでいる。

多軸分離型言語 先ず、コミュニケーション・役割型言語の内対格言語タガログ語の例である：

- a. **mag-salis ang babae** ng bigas sa sako para sa bata.
PR.T.取る **T** 女性 **PA** 米 **DIR** 袋 **BEN** 子ども
 「女性は、子供のために袋からコメを取り出そうとする」
 Женщина возьмет рис из мешка для ребенка.
- b. **aasalin ng babae ang bigas** sa sako para sa bata.
PA.T.取る **PR** 女性 **T** 米 **DIR** 袋 **BEN** 子ども
 「米は、女性が子供のために袋から取り出そうとする」
 Женщина возьмет **рис** из мешка для ребенка.
- c. **aalian ng babae ng bigas ang sako** para sa bata.
DIR.T.取る **PR** 女性 **PA** 米 **T** 袋 **BEN** 子ども
 「袋からは、女性が子供のために米を取り出そうとする」
 Женщина возьмет рис из **мешка** для ребенка.
- d. **ipag-salis ng babae ng bigas sa sako ang bata**.
BEN.T.取る **PR** 女性 **PA** 米 **DIR** 袋 **T** 子ども
 「子どものためには、女性は米を袋からとりだそうとする」
 Женщина возьмет рис из мешка для **ребенка**.

NG の役割指標 (PR[incipal], PA[tinative], DIR[ective], BEN[efactive]) は NG 前に置かれる ng (PR と PA 役割), sa (DIR 役割), para sa (BEN 役割) によって、またテーマ指標 (T[heme]) は名詞前に置かれる ang によってマークされる。また、トピック NG の役割指標が動詞付接辞として置かれる：mag-は Principal-topic の接頭辞、-in は

²² Cf. クリモフ『内容類型学の原理』第1章最後 (Principy kontensivnoj tipologii, p.74.) に若干言及；Li Ch. & S.Thompson, Subject and topic: A new typology of language, 1976; E.Hope, The deep syntax of Lisu sentences, Pacific Linguistics, Australian National Univ., 1974.

Patinetive-topic の接尾辞、-an は Directive-topic の接尾辞、ipag- は Benefactive-topic の接頭辞である。NG の PR 指標と PA 指標は共通であるが、これらが T に立つときは動詞形中で PR と PA の区別がなされる。同語は「意味的な対格言語、つまり主語、補語関係の統語関係をもたない言語」に所属させている。ただし、能格言語あるいは活格言語と解釈する研究者[T.Ramos]がいることにも言及している[Кибрик, 2003, 130-131, 160-162]。

多軸分離型の内コミュニケーション要素と役割的要素を分離して個別に構造化する能格言語の例としては、以下のツアフル語が挙げられる。ツアフル語については、意味的な能格言語の典型として上に挙げたが、ダゲスタン諸語の最近の研究では、それら諸語（ラク語、バグラル語、他）が基本的には単一軸の意味的な能格言語（役割定位言語）でありながら、「多くの場合コミュニケーション的観念の表現手段用の特別なコード化を發展させつつある、すなわちコミュニケーション的役割的言語へ向って動きつつある」[Кибрик, 2003, 128, 162-163.] :

- a. malhamad-e: χaw alja=Ø=?a-wo-d.
 マホメド=ERG 家.IV.NOM IV=作る-COP-IV
 「マホメドが家を建てる」(Магомед строит дом.)
- b. malhamad-e: χaw-wo-d alja=Ø=?a.
 マホメド=ERG 家.IV.NOM-COP-IV IV=作る-IPF
 「マホメドが家を建てる」(M が建てるのは家だ) (Магомед строит дом.)
- c. malhamad-e:-wo-d χaw alja=Ø=?a.
 マホメド=ERG-COP-IV 家.IV.NOM IV=作る-IPF
 「マホメドが家を建てる」(家を建てるのは M だ) (Магомед строит дом.)

上例で、コミュニケーション上の焦点化（フォーカス）を担うのは、wod（「浮漂する」«плавающий[d drifting]»助動詞とされる）である。wod が動詞に前接辞（enclitic）的に付置される a. の文はコミュニケーション面で中立的な文であるのに対して、b, c の文ではこの wod がそれぞれ焦点化される名詞に「浮漂」して接辞される。キブリクは、この焦点化を担う指標は他にもあり、それらは本来多機能的であるが、レーマの範疇に近いものと推定している。上の例文の（ ）内の和訳は、「テーマあるいはトピックの範疇（Agentive の役割範疇に同調する）の発生を好適化する対格言語とは対照的に、能格諸

言語ではフォーカス/ レーマの範疇 (Patientive の役割的意義と同調する) が文法化されるのは偶然ではない」[Кибрик, 2003, 162.], という指摘に従ったものである。

多軸分離型のコミュニケーション的・役割的活格言語については、上で単一軸役割言語としたアチェ語が再度ここで挙っているが、その理由は上述の通りである。ただし、トピックの存在を仮説しても、それはアチェ語を意味的な活格言語とする解釈に変更を加えるものではない。また、多軸分離型に属する「確かな三分立言語例はないが、それはこのタイプの存在不可能性を証するものではない、問題は、同タイプの言語が極めて少ないことである」[Кибрик, 2003, 163.]。

多軸分離型の内、「主として」能格図式による直示的・役割的言語の例としてイイマス語が挙げられる[Кибрик, 2003, 163-167.]。ところが、ここでは能格図式と三分立図式と対格図式が共存し、3 人称 (нелокатор [unlocutor]) に対しては能格図式を、1-2 人称 (локатор [locutor]) に対しては三分立図式あるいは対格図式を志向する。しかも、役割的要素と直示的要素を表す人称指標は複雑に絡み合い、unlocutor 指標の配列 (3P-3A-R) と locutor が絡む指標配列 (3P-1/2A-R ; 3A-1/2P-R ; 2A-1P-R²³) では、配列順が異なる。この場合、語根 (R) 前が最も重要な位置 (有徴的位置) であり、先頭位置は無徴的位置ないしは有徴性が低い位置で、次のような ① 有徴性階層 (左から右へ向って有徴性が高くなる) と ② 人称指標配列原則が存在するという：

- ① (a) 直示性階層： 3 人称 < 2 人称 < 1 人称
 (b) unlocutor (3 人称) の役割階層： Patientive < Agentive
 (c) locutor (1-2 人称) の役割階層： Agentive < Patientive
 ② 先頭位置 語根前位置
 (無徴化共演項) + (有徴化共演項) + 語根 (R)

若干例だけを拾っておく。

(i) A, P とも Unlocutor から成る文である：

- a. pu-wat. a' na-wat.

²³ 1A と 2P の組合せの場合は、これら人称の融合指標が使われ portmanteau-R のように配列される (cf. 以下 III-b の例) [Кибрик, 2003, 165.] ; その他詳細については、キブリク [Кибрик, 2003, 163-167.] を参照。

- | | |
|-----------------------------|-----------------------------|
| 3PL.S.-行く | 3SG.S.-行く |
| 「彼らは去った」(Они ушли.) | 「彼は去った」(Он ушел.) |
| b. pu-n-tay. | b' na-n-tay. |
| 3PL.P-3SG.A-見る | 3SG.P-3SG.A-見る |
| 「彼が彼らを見た」(Он увидел их.) | 「彼が彼を見た」(Он увидел его.) |
| c. na-mpu-tay. | c' pu-mpu-tay. |
| 3SG.P-3PL.A-見る | 3PL.P-3PL.A-見る |
| 「彼らが彼を見た」(Они увидели его.) | 「彼らが彼らを見た」(Они увидели их.) |

人称接頭辞は先頭位置か語根前位置かによって二つの異形態をもつ: pu- / -mpu- (3pl)、na- / -n- (3sg)。二項動詞は、上述のように、<Patientive + Agentive + 語根>の配列順(3P-3A-R)をとる。これは能格図式に則っている。

(ii) 次は locutor 共演項を含む文である:

- | | |
|------------------------------|---------------------------|
| a. ama-wat. | |
| 1SG.S-行く | |
| 「私は去った」(Я ушел.) | |
| b. pu-ka-tay. | b' na-ka-tay. |
| 3PL.P-1SG.A.-見る | 3SG.P-1SG.A-見る |
| 「私が彼らを見た」(Я увидел их.) | 「私が彼を見た」(Я увидел его.) |
| c. pu-ŋa-tay. | c' na-ŋa-tay. |
| 3PL.A-1SG.P-見る | 3SG.A.1sg.P-見る |
| 「彼らが私を見た」(Они увидели меня.) | 「彼が私を見た」(Он увидел меня.) |

この場合、ama は Agentive (-ka-) や Patientive (-ŋa-) のハイパーロールに對置される単一項ハイパーロールの専用指標である。したがって、locutor 共演項を含む文におけるコード化は三分立図式に従っている。ただし、pu 指標(pl)と na 指標(pl)は何れも Patientive、Agentive 両用の3人称共演項を表している、つまり共演項の役割的特徴を特定していない。

(iii) 次は両共演項とも locutor である場合 (kampan は portmanteauーcf. 註 23):

a. **ma-ŋa-tay.**

2SG.A-1SG.P-見る

「君が私を見る」(Ты видишь меня.)

b. **kampan-tay.**

1SG.A+2SG.P-見る

「私が君を見る」(Я вижу тебя.)

多軸分離型の内、役割階層を含まない二軸、三軸を組み合わせた直示的・コミュニケーション的言語については、「経験的ベースに確かな類例が全く存在せず、また理論的な確からしさが低く研究が未開拓であるから、このタイプは霧に包まれたままである」。直示的・コミュニケーション的・役割的言語もどうやら確かな例は示せないようである [Кирик, 2003, 167-168]。これらは存在確率が低いのである。

多軸累加型言語 多軸分離型は単一軸言語と同じく統語的に中立であり、種々の意味要素が直接的にコード化され、そのコード化には透明性があり、それを統語的に変更することはできない。ところが、既述のように、累加的技法は役割的要素に加えて語用的要素—コミュニケーション的、直示的要素等—を積み重ね、融合して行くのであるから、語用的要素の圧力で当然これら役割的要素は圧縮され、結果として意味役割と形式間の透明度は低くなり、統語関係が律する構造化が発展すると思われる。その究極の結果が主語の出現である：「主語的統語関係は、一つの形（すなわち主語）が同時に NG の種々の関与的特徴をシンボル化する場合の累加的コード化技法の典型的なケースであることは、明らかである」 [Кирик, 2003, 151.]²⁴。

統語的対格言語。その典型は例えば英語であるが、当然、統語的対格言語も現実には非常に多様である。諸言語は軸尺目盛上、累加性目盛上の様々な位置に連続的に並んでおり、また対格（主格）技法とコミュニケーション的意義や直示性意義との組合せ態様に偏差があるからである。例えば、ロシア語の統語関係（主語と補語）は、英語に比してはるかに役割に定位している。あるいはまた、英語は受動化によって Patients を昇格してコミュニケーション上の必要性にも対応する（累加的技法による）のに対して、ロシア語ではコミュニケーション上の特徴づけは役割機能とは分離して（能動文の語順の転換とイントネーションによって）担うことになる²⁵。

²⁴ Cf. 註 5；本稿筆者の知る限りでは、ロシアにおいてもすでに例えば「言語学の諸問題」誌 (Вопросы языкознания 1995, №5) に現れた論文 (L.S. イェルモラーイェヴァ「主格構造言語の意味的決定因子に関する問題によせて」— Л.С. Ермолаева, «К вопросу о семантической детерминанте языков номинативного строя») がそれを示している。

²⁵ Cf. I(nom) am merry / Мне(dat) весело ; It is cold / Холодно ; I feel cold / Мне

統語的能格言語。以下は、a) 一項文と b) 二項文を繋いで等位文化する場合の同一指示名詞の削除態様を例示する、すでに「逆受身」の典型として周知のディルバル語例である[Кибрик, 2003, 173-174]。英語等対格（主格）言語では *He came and Ø hit her.* の *he* は同一指示名詞であるから省略（Ø 化）されるが、能格言語であるディルバル語で以下の文 a) と b) をこのまま単純に繋いでも *he* は省略できない。以下の a) 文では「男」は主格（Absolutive）であり、b) では能格（Agentive）であるからである。英語のような等位文化を行うためには、能格の「男」を主格に変換する逆受身（逆受動）という操作—能格の主格化と動詞中の逆受動化指標 *-ŋa-* と「女を NOM」の与格 DAT 化—が必要となる。それが c) の文である：

- a. *ba-yi yar^ʔa banin^ʔu.*
 CL-NOM.I 男 **NOM** 来る
 「男が(NOM)来た // 行く」(Мужчина пришел // идет.)
- b. *ba-la-n d^ʔugumbil baŋgu-l yar^ʔa-ŋgu balgan.*
 CL-NOM.II 女 **NOM** CL-ERG-I 男-**ERG** 殴る
 「男が(ERG)女を(NOM)殴った // 殴る」(Мужчина побил // бьет женщину.)
- c. [*ba-yi yar^ʔa banin^ʔu*] [*Ø_i ba-gu-n d^ʔugumbil-gu balgal-ŋa-n^ʔu*]
 CL-NOM.I 男 **NOM** 来る **NOM** CL-DAT-II 女-**DAT** hit-ANTIPASS-TENSE
 「男が来ると、(男が[Ø が]) 女を殴った」(Мужчина пришел и побил женщину)

ただし、この逆受身化は役割要素に定位した操作ではなく、語用（コミュニケーション）的動機が優先した操作すなわち統語的な操作（主語化）である。この点で、意味役割に定位した既述のベジタ語（カフカース）の逆受身とは性質を異にする。キブリクがディルバル語を統語的な能格言語に算入する所以である。こうして、c) 文ではこの逆受身操作のおかげで後半節の「男が」は削除可能となる。

холодно; I tremble/ Меня(acc) трясет(trans-v., 3.sg); to believe something(acc)/ верить чему(dat); to fear s-t./ бояться чего(gen); to evidence s-t./ свидетельствовать о чем(prepos).)、等々の例では、英語主格は露語では Experiencer 与格等で、英語他動詞目的語（補語）は、露語では与格、属格、前置格（所格）等で現れている。また、ディアテシスの分野：能動文 *The red fish ate the blue fish.*// 能動文 *Красная рыбка(The red fish) съела(ate) синюю рыбку(the blue fish).* ⇒ 受動文 *The blue fish was eaten by the red fish.*// 能動文 *Синюю рыбку(The blue fish) съела(ate) красная рыбка(the red fish).* 露語では受動化せず、語順の転換によってテーマ化、焦点化が行われる[Кибрик, 2003, 172]。

一方、対格[主格]言語では He came and she hit him. → He came and she hit (Ø)の変換は不可であるが、ディルバル語ではこれが可である。すなわち、以下の等位文 d)では、能格言語の特徴を発揮して、前半節の「男が」(Absolutive)は後半節の「男を」(Absolutive)と同一指示的だから削除されている²⁶。なお、a, b, c, d 文の名詞前に置かれる要素は限定詞 (article) であり、これは名詞の格と類 CLASS の面で一致する：

- d. [ba-yi yar^ya banin^yu] [Ø_i ba-ŋgu-n d^yugumbil-r^yu balgan]
 CL-NOM.I 男 NOM 来る NOM CL-ERG-II 女-ERG 殴る
 「男がここへ来ると、女が（男を[Øを]）殴った」
 (Мужчина сюда пришел и был побит женщиной.)

次はカパンパ(ン) ガン語(中央フィリピン)が関係節化(relativization)を行う場合、母胎文の主格に合せて、埋め込み文では基底文の能格(Agentive 項「彼らが」)を主格化し、Absolutive 項「陶器壺を」を斜格化して述語を逆受身形に変換する例である(埋め込み節内では同一指示名詞「彼らが」が削除されている;karetang は名詞限定辞 determinant) [Ки́брик, 2003, 175]：

- retang [papalu ... karetang banga] ... dakal la.
 彼ら.NOM 割る ANTIPASS それ等.OBL 陶器壺 多い 3.NOM
 「彼らは [彼らが陶器壺(pl)を] 割る」多い (「陶器壺を割る者は多い」)
 Тех, [кто разбивает глиняные горшки], много.

ここでも関係節化という構文的圧力が優先して、意味的能格言語が統語的能格言語に変じて行く過程が示されている。

統語的三分立言語については、「その言語例を拾い集めるのは容易ではない」[Ки́брик, 2003, 176]としながらヴァン・ヴァリン等の資料から引き出されるハカルテク語の錯綜

²⁶ 周知のように、欧米や我が国の研究者等は、このことを以て、ディルバル語が「統語的な能格言語」、つまり能格言語のビヴォット原則 (S=P≠A) に則る言語である、ことを確認する。一般的に能格的形態法+対格的統語法のセットはむしろ大多数の能格言語の姿である、という認識の下で、同語は形態でも統語でも一貫した数少ない言語の例として紹介される。彼らの「統語的」はいわゆる一連の統語テストによる診断の結果を想定したものである。したがって、キブリクが同語を「統語的な能格言語」に算入する理由とはニュアンスを異にするとと思われる。

形態法と統語法の分裂 最後に、どの関係類型学でも当然のように言及される形態法

wa-hi (1.SG.ACT-来る)「私は(乗って)来た」// ma-khúže (1.SG.UND-病気だ)「私は病気だ」;
 ya-ʔú (2.SG.ACT-来る)「君は(歩いて)来る」// ni-háske (2.SG.UND-背が高い)「君は背が高い」;
 Ø-wa-kté (3.SG.UND-1.SG.ACT-殺す)「私が彼を殺した」// ma-Ø-kté (1.SG.UND-3.SG.ACT-
 殺す)「彼が私を殺した」; 等

a. wa-Ø-Ø-yáki. na Ø-Ø-kté.
stem-3SG.UND-3SG.ACT-見る and₁ 3.SG.UND-3SG.ACT-殺す
「彼が彼を_j見て、彼を_{j/k}殺した」
Он_i увидел его_j и убил его_{j/k}.

b. wa-Ø-Ø-yáki čha Ø-Ø-kté.

²⁸ Actor のハイパーロールは wa(1sg), ya(2sg)、Undergoer のハイパーロールは ma(1sg), ni(2sg)、3 人称の Actor, Undergoer は何れも Ø; cf. G.A.クリモフが挙げたダコタ語の二系列(活格と不活格)の人称指標表(「新しい言語類型学—活格構造言語とは何か」, 三省堂, 1999, p.110); キブリクはここでもヴァン・ヴァリンの分析に依っている。

stem-3SG.UND-3SG.ACT-見る and₂ 3.SG.UND-3SG.ACT-殺す

「彼が_i彼を_j見ると、その彼が_j彼を_i殺した」

Он_i увидел его_j, и тот_j убил его_i.

c. Ø-ʔi na Ø-Ø-kté.

3SG.ACT-来る and₁ 3.SG.UND-3SG.ACT-殺す

「彼が_i来て、彼を_j殺した」

Он_i приехал и убил его_j.

d. Ø-ʔi čha Ø-Ø-kté.

3SG.ACT-来る and₂ 3.SG.UND-3SG.ACT-殺す

「彼が_i来ると、その者が_j彼を_i殺した」

Он_i приехал и тот_j убил его_i.

e. Ø-hi na Ø-t'e.

3SG.ACT-来る and₁ 3.SG.UND-死ぬ

「彼が来て、死んだ」

同語について門外漢の本稿筆者にはこうした解釈の是非を評する資格はないが、上の例文が active 系列と inactive 系列（キブリクのいう Actor と Undergoer）の指標の弁別がない 3 人称を含むものであること、また、「死ぬ」動詞についてはクリモフも論じたが、同語における同動詞の扱いに安定性があるのか、同語の動詞の語彙化（活格動詞と不活格動詞）原理や名詞の語彙化原理との相関性の動向、すなわち体系全体の中での位置づけ如何、等の情報が期待されるのではないだろうか²⁹。

なお、補文化（complementation）に際しても、同様である。例えば、以下の例文の b は a の Actor の削除文、d は c の Undergoer の削除文である。Actor か Undergoer かに限りなく、削除されている。すなわち対格統語法である（なお、-čhi- = 1 人称 Actor + 2 人称 Undergoer の融合指標 pomanteau）：

a. ya-ʔu wa-čhi-yake.

2.SG.ACT-来る stem-2.SG.UND+1.SG.ACT-見る

「私は君が来るのを見た」（Я видел тебя приходящего。）

b. Ø-ʔu wa-čhi-yake.

²⁹ Cf. クリモフ『新しい言語類型学』（三省堂）。

- Ø-来る stem-2.SG.UND+1.SG.ACT-見る
「私は君が来るのを見た」(Я видел тебя приходящего.)
- c. n-ištime wa-čhi-yake.
2.SG.UND-眠る stem-2.SG.UND+1.SG.ACT-見る
「私は君が眠っているのを見た」(Я видел тебя спящего.)
- d. Ø-išteme wa-čhi-yake.
Ø-眠る stem-2.SG.UND+1.SG.ACT-見る
「私は君が眠っているのを見た」(Я видел тебя спящего.)

次に、能格的形態法と対格的統語法の分裂については、わが国ではむしろ能格言語の普遍的傾向として周知であるが、キブリックが挙げるのはエンガ語（パプア・ニューギニアの非オーストロネシア語）である[Кибрик, 2003, 181-182]³⁰。能格は Agentive 項に付加される -mé によって、主格はゼロ指標である。a は一項文、b は二項文であり、c は a と b の文を繋いだ等位文である。c 文の述語「行く」に付される -o 指標は、第一節と第二節における「彼は」の同一指示性を、同じく等位文である d 文の述語「行く」に付される -pa 指標は第一節から第二節への指示性の切り換えを、示す。すなわち、c 文では等位文接続が対格技法によって行われ、同一指示名詞「彼」が Principal として扱われて「彼」が第二節で削除される。

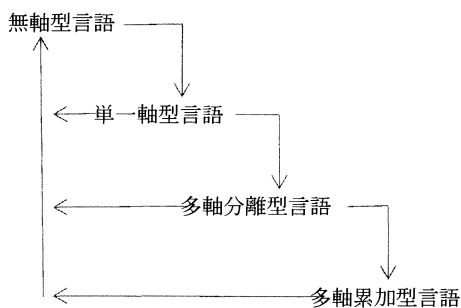
- a. baá p-é-á.
彼 行く -PAST-3.SG
「彼は出かけた」(Он пошел.)
- b. baá-mé kalái p-i-á.
彼-ERG 仕事 する -PAST-3.SG
「彼は仕事をした」(Он работал.)
- c. baa-mé pa-o kalái p-i-á.
彼-ERG 行く -SAME 仕事 する -PAST-3.SG
「彼は歩きながら仕事をしていた(同時に)」(Он шел и работал [в то же время])
- d. nambá p-e-o-pa baa-mé kalái p-i-á.

³⁰ 「一般的に能格言語と呼ばれる大多数の言語は、統語的には対格的であるということが近年判明して来た」(柴谷方良「能格性をめぐる諸問題」—『言語研究』90, 1976, p.78.)

私 行く-PAST-1.SG-DIFF 彼-ERG 仕事 する-PAST-3.SG
 「私が歩いていたそして彼は仕事をしていた」(Я шел и он работал.)

こうした分裂現象について、キブリクは、この形態と統語の不一致が「普通、歴史的シフトの結果であり、その場合、形態は言語の先行状態を保存する、すなわち基底（起点）のディアテシスの意味役割を表す」[Кибрик, 2003, 182]、とする正しい指摘を行なっている。この点ではクリモフと同じ認識である。関係類型学は、項の形態基準といくつかの統語テスト基準という二つの基準を個々別々に調査した結果の「普遍」を提示するが、項と述語の関係に専ら注意を集中する関係類型学にとって、「分裂」の結論は予想されて然るべきではないのか。それが何故「分裂」するのか、そのことを問うことこそ、類型学の課題ではないのか。しかし、本稿筆者には、キブリクは正しい指摘をしながら、個々具体的な事例によってこの課題には応えていないように思われる。

キブリクが提示する「歴史的展望から見た言語類型のあり得る変化過程」図は、以下の通りである[Кибрик, 2003, 186-187]：



上図で、矢印の方向は発展方向である。逆行はあり得ないとするが、このサイクルを完結して最初の段階に回帰する過程は認めている（いくつかのピジン語がその例であるという）。また、統語関係のない段階は統語関係のある段階に先行する（個々の段階内で）という。

また、以下の表は、上に例示した具体的な諸言語の類型所属先を示している[Кибрик, 2003, 184]：

言語類型	英語	エンガ語	ディルバル語	アルチ語	タガログ語	イイマス語
多軸分離型	－	－	－	－	＋	＋
多軸累加型	＋	＋	＋	－	－	－
単一軸役割定位型	－	－	－	＋	－	－
形態的対格型	＋	－	－	－	＋	＋/－
統語的対格型	＋	＋	－	－	－	－
意味的対格型	－	－	－	－	＋	＋/－
形態的能格型	－	＋	＋	＋	－	＋/－
統語的能格型	－	－	＋	－	－	－
意味的能格型	－	－	－	＋	－	＋/－

Ⅱ. クリモフの内容類型学

クリモフがいま存命であるならば、上に概観した今日におけるキブリクの関係類型学構想を如何に評するであろうか。キブリクの1992年著作段階では見られなかった「認知的関係類型学」、「認知的アプローチ」[Кибрик, 2003, 116-117]なるタームを含めて「認知的」というエピテトが2003年著作では随所に頻出していることから観ても、明らかに欧米類型学への接近が益々顕著であると思われる。それは、2003年著作第二部「歴史的展望における現代言語学」[Кибрик, 2003, 61-106]に記述される学会事情や欧米との外的な接触事情（cf. 特に1992-2002年について記述された学術交流[Ibid., 95-99]）から推しても、その関心の向うところが窺われる。かつて山口巖氏は、ロシアにおける内容類型学の発展過程について言及して、統語論のレヴェルを中枢に据える観点が次第に優勢になって来たが、「それは未だ理念的な領域にとどまっていた」のに対して、「欧米、日本においては統語論のレヴェルにおける類型学的考察は、ロシアにおけるものに較べて、より具体的、緻密なものとなっているように思われる。…その中でも最も重要であると思われるのは、いわゆる統語的ピボット syntactic pivot という概念である」、と評されたことがあった³¹。この時期から見ると、隔世の感があるのではないだろうか。現代ロシアにおいて、項の機能的、「認知的」内実を微細に考察する関係類型学が進展を見せているからである。

ところで、クリモフの類型学構想、言語類型学の理論的諸問題全体を見る上で最も重

³¹ 山口巖『類型学序説ーロシア・ソヴェト言語研究の貢献』, 京都大学学術出版会, 1993, p.49, 56.

要かつ必須的著作は、「内容類型学の原理」(G.A.Klimov, *Principy kontensivnoj tipologii*, Moscow, Nauka, 1983[再版 URSS, Liblocom, 2009])である³²。この著書は、欧米における関係類型学の潮流についても批評している³³。クリモフは、ソヴィエト・ロシアの30-40年代から継承して来た内容類型学を含めて革命前からロシアの言語学は伝統的に内容面に注意を注いで来たが、世界の類型学の流れ全体もその気風を受けて「形式から意味へ」でなく「意味から形式へ」と方向転換を遂げる中で、この方向性は特に欧米では関係文法あるいは関係類型学として「屈折して現れている」、と見ていたのである[Klimov(Klimov), 1983(2009), 207, cf.12]。

さて、上に概観したキブリクの関係類型学の特徴をあらためて簡単にまとめるとすれば、どうなるか。第一には、「主語」(Subject)を基準として異類型諸言語の類型学的比較はできない、したがって、徹底して純意味的要素だけを類型基準とする機能的、「認知的」類型学を構築すべきこと;すなわち述語と項の関係において、項を、A(gens), O(bject), S(subject)として、あるいは意味役割的要素を重視しつつ統語的要素 S(subject)を加えた A(gens), P(atiens), S(subject)として、すなわち固定的な素因子(primitives)として記述する関係類型学(関係文法)とは異なっており、原点(基底)にプロトタイプの Agens と Patiens という純意味役割的素因子を置きつつも、それを基礎としてそれらの「換喩的」拡張たるハイパーロールすなわち歴史的に変動する意味役割的素因子を基礎として項間の関係を記述すること、第二に、名詞項には役割的要素(role dimensions)は勿論のこと様々な語用的要素からなる意味的諸要素(semantic dimensions)が張り付けられること、これらの各種意味要素(dimensions)の「軸」(pivot)³⁴は歴史的には無軸→単一軸→多軸へと発展して行くこと、第三に、「主語」は役割的要素の拡張たるハイパーロールと意味的諸要素(semantic dimensions)の膠着(分離的貼り付け)と融合(累加的張り付け)の究極的帰結であるとして、原点に「主語」の生成を認めないこと、にもかかわらず、第四に、関係類型学一般と同じく、いわゆる統語的ピヴォット検証によって「分裂」を証すること、第五に、形式的表徴(マーク)性(有徴性―無徴性)を基礎として、活格型、能格型、対格型言語に加えて、中立型、三分立型言語を認めること(ただし、Agens と Patiens の役割の面では、その形態的マーク性から、現実の言語はともかく、純理論的には 15

³² Г.А.Климов, Принципы контенсивной типологии, Москва, Наука, 1983 [再版 УРСС, Либроком, 2009]

³³ 『類型学研究』第2号(2008)に紹介した拙論では、特に取り上げなかったが、実は第1, 2章には関係類型学批判が含まれている。

³⁴ Cf. 註 11

通りの A, P の組合せすなわち 15 類型の言語が可能だと考えている[Кирик, 1992, 187-188; 2003, 149]。

一方、クリモフは、キブリクが関係類型学的な観点からする、「意味から形式」への類型学の転換を支持するキブリクの発言を取り上げただけではなく[Климов, 1983(2009), 14 他]、能格構造言語に働く項の分類原理が *agentive – factitive arguments* (作因項—叙実項) というハイパーロールに基くものであるというキブリクの研究成果を採用して、このタームを能格言語の動詞の語彙化原理を表す用語 (作因動詞—叙実動詞 *agentive – factitive verbs*) にも、また能格構造の根底に働く意味的動因子 (作因・叙実原理 *agentive – factitive principle*) の名称にも使っている[Климов, 1983(2009), 97, 95, 177 他多数]³⁵。活格構造についても、クリモフは *active – inactive* の対立をハイパーロールだと認めている[Климов, 1983(2009), 119]。つまり、周知のように、*active – inactive* のさらに歴史的深層にプロトタイプの意味的動因子 *semantic stimulus* (意味的決定因子 *semantic determinant*) を想定していたのであり、実際 *animate – inanimate*、さらに奥深い深層に類別 *class* 原理があるという試案を提示していたのである。勿論、主格言語もまたハイパーロール的拡張の帰結であることを認めていた:「活格組織体系の方は、類別構造の組織体系との形式的な接点を見せる一方で、能格ないしは主格組織体系との、内容面でのいくつかの共通性を示している。この点で特に重視すべきことは、三言語類型 (活格型、能格型、主格型—石田) 全ての意味的決定因子 (*semantic determinant*) が、類別構造の内的動因子とは異なって、それらの基底にあるハイパーロールの不安定な性格において共通点をもつことである」と[Климов, 1983(2009), 172]。キブリクの場合は、関係類型学の観点から、項に関してのみプロトタイプの *Agens – Patiens > Actor – Undergoer* (活格型) > *Agentive – Factitive (Absolutive)* (能格型) > *Principal – Patientive* (主格[対格]型) という拡張発展過程を想定しているにすぎず、例えば活格言語に関するキブリクの *Actor – Undergoer* とクリモフの *active – inactive* は非常に相似的な理解ではあるが決して重なりはしない。*Actor – Undergoer* とそれ以前のプロトタイプ *Agens – Patiens* の既述のコンセプト (定義) の中に意志的—非意志的 (*volitional – non-volitional*) あるいは制御的 (*controlling*) が含まれているが、クリモフの想定する基準的な活格言語における *active – inactive* は本来単に客観的現実の図像的反映あるいは模写としての指示対象でしかない。*volitional* あるいは *controlling* の有無の想定は、そもそも主格言語

³⁵ キブリクは、上述のように、1992 年著作 (①) で使っていた *factitive* という用語を 2003 年著作 (②) では、「伝統に従って」不本意ながら *absolutive* に替えている → cf. 註 17。

のプリズム、主体性の発想がアプリアリに常に付きまとう欧米流の類型記述の特徴であると思われる。しかし、原点に意志と制御性をもった *Agens* と *Patiens* を想定する観点を除けば、原点からのハイパーロールの究極的拡張が「主語」性であるというキブリクの結論は、人類史における言語の構造化過程は主体の能動化過程である、とするクリモフの最終的な結論と重なる面はある。すなわち、クリモフは、人類史における言語の構造化過程を歴史的な諸類型の意味的動因子（決定因子）の弁証法的な連続的再編と見なし、動因子の主体・客体関係への定立度の増大過程と捉えているからである。キブリクのハイパーロール的拡張とクリモフの動因子の主体・客体関係への定立度の増大という過程は、同一事態の異なる認識の表現として興味深い。

今にして思えば、クリモフのいう内容類型学が語彙、統語、形態、形態音素の諸特徴が相呼応する全一的な総体系類型学（whole system typology）であってみれば、能格構造体全体へのキブリクのターム *agentive – factitive* の採用は、関係類型学の成果を取り込みつつ、構造部分は構造全体の系であると考えた内容類型学の基本原理に基いた然るべき軌道修正を展望したものであった、という思いが浮かぶ。勿論、キブリクによる、項の意味・機能的そして「認知的」？な微細な分析による「主語」の本質や文法的「態」（voice）の発生と語用的因子の相関性、等の解明には一定の真理性があると考えることができる。そうであればこそ、クリモフは上記のように、キブリクの「項」についての研究成果を取り込んだのである。しかし、クリモフは、一方ではキブリクの微細な項と項の拡張発展（ハイパーロール化）過程の研究の成果を採用しつつ、当然「内容類型学の原理」の観点からキブリクの類型論の問題点についても、関係類型学一般の種々の „qui pro quo“ に対して批判的であったことが窺われる。

先ず総論的に述べれば、以下のような問題点が思い浮ぶ。第一には、関係類型学は、類型の判定に二つの基準を用いる、すなわち項の形態的特徴（あるいはそれに代る動詞語中の人称指標の特徴）＝マーク性という基準と正に主語（Subject）をコントローラーとする統語的テスト＝統語的ピヴォットという基準であり、しかもこれら二つの基準は別々に切り離された基準であって、この二基準間の体系的な意味内容的・論理的相関関係は不分明である。つまり、この二つの基準が当該類型の構造体の体系全体とどのように関係しているのか、という位置づけが判然としない。したがって、前提そのものからして、形態と統語という二基準間の「分裂」が予定されている、運命づけられている類型診断法である。第二に、関係文法は、名詞や動詞の語彙化原理一般についての検討を欠く。中でも最も重要な動詞の語彙化原理とその歴史的シフトについては無視して他動

詞・自動詞あるいは他動性・自動性の対立を既定の事実として疑うことすらなく、それが歴史的範疇であることを自覚していない。しかも、この統語テストによって判明することは単に主格型（対格型）か非主格型かという診断であって、能格型か活格型か類別型かという判定すなわち非主格型の内実は確定し得ない³⁶。第三に、関係文法には格の目録、機能と構造体系全体との関係に関する考察が欠落する。キブリクは、従来の関係類型学があまりにも抽象化、形式化したピヴォット基準（A, P, S あるいは A, O, S）によって切り捨てた構造の核心要素を可能な限り拾い上げ、その形式的類型診断の歪みを正すべく、新しい類型学的基準として、意味軸（意味的ピヴォット）の内容とその組合せ法、軸に張り付けられるプロトタイプの意味役割項とハイパーロール化する意味役割項、項のマーク性、統語テストというより具体的で多次元的な基準をあらためて提起したのであるが、これもクリモフの用語を借りるならば、結局は項の形態基準（それもほとんど能格と主格と対格だけの）と意味軸基準という二種の部分系を基準とする「言語内類型」[cf. Климов, 1983(2009), 23, 29-30, 131, 208, 210]の域を出ていない、という印象を受ける。関係類型学と内容類型学は、実経験的あるいは純理論的に、主体・客体関係の表現特性の差異にこそ類型学的基準の最も重要な鍵があるという点ですでに共通認識に到達していると思われるが、もしそうだとすれば、その主体・客体関係の規定要素を項の関係と見るか構造体系全体に貫徹する関係と見るか、という点に両類型学の認識の差異がある。関係類型学は、主体・客体関係の核心は、項の形態を基にしてその項と項の間に現れる関係に尽きる、と見なす。一方、内容類型学は、主体・客体関係の表現のあり方が項間の関係にとどまらず言語構造レヴェル（階層）全体に及ぶ網をかけ、それを規定し体系化する、すなわち語彙も統語法も形態法もさらに形態音素をも構造化すると考えており、さらに主体・客体関係の核心が語彙化原理なく動詞の語彙化原理にこそあると見ている（この点については後述）。クリモフが言語構造の体系性に関して繰り返し警告していたことが想起される：「任意の言語レヴェルの何がしかの言語特徴がさらに大きな呼応特徴組織に含まれるという事実抜きには、一般的に言って、恐らく、その特徴の類型的関与性について納得し難いであろう」[Климов, 1983(2009), 27]；「あれこれらの構造特徴を、言語類型のより大きな呼応特徴組織に組込むことができるまでは、これら特徴の類型的関与性に常に重大な疑念が残る可能性がある」[Климов, 1983(2009), 30]。ところで、キブリク（あるいは関係類型学一般）にあってクリモフ（内容類型学）にな

³⁶ Cf. 山口巖『類型学序説』, p.59

いものがある。それはピヴォット論に関する主節と従節、等位節、関係節等の間における主体・客体関係の指示性に対する観察である。このことは、関係類型学にとって、構造の本質に関する構造総体諸階層間の連係・包含関係の観察よりも、項と項の関係が何にもまして核心的要素であることを示している。また、クリモフの再三の批判の中には、関係類型学が、例えば能格言語の検討において、能格構文を、能格言語の包含事象である絶対構文他の文類型との体系的な相関関係の観察を通り越して、主格言語の主格構文と直接比較する点に対する批判も含まれているが、内容類型学からみれば、ここにも関心がいわば体系全体よりも先ず部分系へ向かう特徴が現れているように思われる。結果として、類型の本質あるいは核心に対する見通しという点で、両類型学の認識は大きく隔たることになる。ただし、主節と従節間のあるいは等位文間の項の関係が構造体系全体とどのように連係するかについては、内容類型学も今後精査、検討すべき課題ではあるかもしれない。

上にいう主体・客体関係の核心という点を念頭に置きつつ、各論に移る。クリモフはいわゆる「類型」とその組織構成（組織体系）とその再編過程をどのように見ていたのであろうか。この場合、当面内容類型学が論ずる諸類型は、類別型、活格型、能格型、主格型である。クリモフによる下の諸類型図はすでに様々な機会に再三掲げているが、内容類型学が総体系類型学であるという上述の趣旨からしても、先ず諸類型全体を鳥瞰し、内容類型学の全体構想を捉えるには不可欠の図であるから、敢えて再掲載する³⁷。

³⁷ クリモフは三分型を否定[Климов, 1983(2009), 131, 134]。中立型については最終的には保留している[Климов, 1983(2009), 79]。なお、『新しい言語類型学』（三省堂, p.243.）にも同じ表があるが、「内容類型学の原理」では、中立型は保留され、また能格言語に機能する動詞、補語に関して精密化が図られている。ここに掲げる表は、「内容類型学の原理」に拠っている。この精密化に関する詳細については、『類型学研究』第2号の拙稿を参照；また、欧米や我が国では多くの場合、恐らく名詞項の有徴性を基準に「対格型」と呼称されるが、クリモフは意味（内容）的観点から「主格型」等を使う。キブリクは、次の理由で「主格型」に反対する：「subjectの格によって主格構造という用語が使われるが、これは適切ではない。subjectの普遍性という立証不十分な推定を基にしており、他動詞のsubject形を強調しているからである」[Кибрик, 2003, 130]、と。キブリクの理解とクリモフのその間には齟齬があると思われる。主語格によって「主格型」を呼称しているのではない。「主格型」等の呼称は、各類型二項文において意味役割的に主体格として機能する格の典型がそれぞれ活格、能格、主格であることによる。「主格型」「主格構造」「主格言語」という呼称は、主体・客体原理に基づく意味的動因子に定位した構造であるという認識に基づく呼称である。

		類別型	活格型	能格型	主格型
語彙	名詞	多数事物類	活性類～不活性類	∅	∅
	動詞	(?)	活格動詞～状態動詞	作因動詞～叙実動詞 (能格動詞～絶対動詞)	他動詞～自動詞
統語	構文	?	活格構文～不活格構文	能格構文～絶対構文	主格構文
	補語	?	近い補語～遠い補語	「直接」補語 ～「間接」補語	直接補語 ～間接補語
形態	名詞曲用	∅	活格～不活格	能格～絶対格	主格～対格
	動詞活用	多類別・人称 接辞	活格～不活格系列 人称接辞	能格～絶対格系列 人称接辞	主体～(客体) 系列人称接辞

さて、「類型」とは何か。クリモフは次のようにいう：「内容的言語類型（**контентивный языковой тип** [contentive language type]）とは、先ず第一に、言語の各種諸レベルの一定の呼応諸特徴（**признаки-координаты** [features-coordinates]）の集合体（**комплекс** [complex]）であり、その類型の背後には常に世界の諸言語間に現れる諸言語のいくつかの類型種（**типологический класс** [typological class]）が存在する。内容的言語類型は、これら諸レベル間に存在する構造的諸現象の自然的な階層性を考慮して構想される。特に強調しておく必要があるのは、全てのことから判断して、内容的言語類型は語彙的、統語的、形態的そして恐らくは音韻的レベルの諸特徴から成るのであるから、総体系性という性質をもつ、という点である」[Климов, 1983(2009), 42-43]。つまり、「類型」とは一定の呼応諸特徴総体であること、すなわち語彙、統語、形態、形態音素レベルの諸特徴から成る総体系性という性質をもつこと、その各レベルが階層性をもつこと、を含意している。これについてさらに敷衍すれば、言語類型とは、① 恣意的な一つのレベルを基準とする言語内類型（**тип в языке** [type in language]）ではなく、語彙、統語、形態、形態音素の各レベルが連係相呼応する諸特徴（包含事象 **implication**）の統一的集合体、言語構造総体（クリモフはこれに「構成体」**конструкт**[konstrukt]という用語を当てる）である。したがって、この類型概念は総体系性を前提としており、構造諸特徴間の論理的な相互呼応性、必然性、一貫性を予定する。② この言語構造総体としての類型は、語彙組織を頂点として音組織を最下層とする階層性を形成する、すなわち、言語構造は、語彙レベル→統語レベル→形態レベル→形態音素レベルという下向きの支配関係によって構造化される。尤も、この階層性原理は内容類型学の外で確立され

た言語構造の一般的真理である。また、これは高次レベルの現象から低次レベルの現象の論理的派生性だけではなく歴史的派生性をも意味する³⁸。したがって、意識分野の変動を受けて言語が変化して行くとき真っ先にその変化に反応するのは語彙組織であり、続いて語彙組織の変動は統語組織へ、次いで形態組織へ、さらに形態音素組織へと波及して行く。③ 言語的意識・思考分野の変動を惹起するのは意味的動因子（意味的決定因子 semantic determinant）である。すなわち、活格型類型は活性・不活性原理

（active-inactive principle）、能格型言語は作因性・叙実性原理（agentive-factitive pr.）、主格型類型は主体・客体原理（subjective-objective pr.）が、その動因子である。類別型類型の動因子は当面判然としないが、名詞類別とそれに対応する動詞の類別的接辞系列から判断して、ここでは多類別原理（cf. 有生・無生原理 animate-inanimate pr.）と仮称しておく³⁹。この意味的動因子の変換によって、人類史における言語の相対的な構造化過程は、類別型→活格型→能格型→主格型へと変換して来た（類別型の前段階については当面不明、また活格型→主格型ルートも可、例えば印欧語）。この過程は言語の基本的構造要素を主体・客体関係に定立させる程度の増大過程だと見なすことができる。つまり、人類史における言語の構造化過程は主体の能動化過程である。最後に、統語レベルと形態レベルにおける類型の分裂あるいは混合類型という、関係類型学において一般的な類型診断について言えば、内容類型学の評定は極めて明快である。以上によって、類型とは類型を構成する諸特徴相互間の論理的必然性、体系性、一貫性を前提とする理論的装置であり尺度である限りにおいて、当然その「純正さ」を予定する。ところが、現実の言語は、構造総体として相対的には一つの統一的な全体を構成する一方で、例えば形態レベルで前段階位相の諸要素を残滓・保守しつつ、語彙と統語レベルでは次段階位相の改新的要素を顕すというズレ（矛盾）を含むことになる。これこそ、関係類型がいう「分裂」あるいは「混合類型」である。しかし、クリモフは、混合類型というタ

³⁸ 例えば V.V. ヴィノグラードフ：「形態上の形はすなわち沈殿した統語形式である。形態には、語彙や統語に存在しない、また以前に存在しなかったものは何も存在しない。形態要素と形態範疇の歴史はすなわち統語的境界線のシフト（転移）の歴史であり、統語階層から形態階層への変換の歴史である」（*Виноградов В.В. Русский язык. Грамматическое учение о слове. 1972(1947), стр.31(29).*）。

³⁹ クリモフは類別言語の動因子について類別原理というタームは使っていない。Cf. 「当面鮮明度のはるかに劣るのは、類型学研究が辛うじて言及する類別構造の意味的決定因子である。…この組織の基礎には、量的に変動する一集合の極めて具体的な事物的役割から有生と無生の二項対立に至るまでの一指示対象の対立の組合せがある…。この安定した対立と活格、能格、主格の各組織体系が基礎とする性質上不安定な対立との根本的な違いを強調しておくことが重要である」[Климов, 1983, 114.]。

ームを「形容矛盾」と呼んでいる：「すでに『混合』型という用語自体が *contradictio in adjecto*（形容矛盾）の相当明白な見本である。類型を構想することは、非類型的な要素全てを研究対象の特徴づけから捨象することを求めるからである。類型学の研究実践が証明しているように、言語類型の『純正さ』の原理こそ、言語類型の内的な *ratio* を明らかにすることを可能にするのである。具体的な言語の構造的輪郭を二つの言語類型の混合と特徴づける可能性が存在するどんな場合であれ、それに続けて両類型をある種の一体として統合化（*integrate*）すれば、それは類型学は何の補助的な知識も提供しない無用な構造に変わるのである（周知の如く、混合型という概念は、必然的に、然るべき『純正』型についての考えを予め想定することを前提としている）」[КЛИМОВ, 1983(2009), 30-31]。混合型という規定は純粹類型の想定を自白していることになるからである。したがって、上にいう矛盾（ズレ）を包摂しつつ相対的には当該類型に属して一つの相対的な全体を構成する具体的多様な言語種を、クリモフは類型種（*typological class*）と呼んでいる。クリモフは類型に関して形式と内容の相関関係における弁証法（的理解）を強調しているのである。この点に関してはすでに 1934 年メッシャニーノフも次のように指摘したのであった：「これら全ての段階（当時の類型的分類が前提とする、歴史的に交替する言語諸類型について述べたものークリモフ）は、先行段階の状態の残滓的要素の歴史的な運動と保存の複雑な過程の中で諸特徴が部分的に成層してくるために、完璧な一貫性をもつのは理論的構造においてだけである；実際上は、言語の弁証法的な発展の条件下では、純正な段階的代表言語は全く存在しないであろう」[КЛИМОВ, 1983(2009), 31.]、と。以上から、類型、類型種、言語内類型という三つの概念の峻別と「類型」についての弁証法的理解という点に留意しておくべきである。類型学にとって体系性と歴史主義の原則の貫徹についてクリモフが再三強調しているのも、同じ趣旨である。この点で、関係類型学は、類型の概念に上にいう総体系性という自覚を欠き、弁証法的認識を欠く、すなわち体系性と歴史主義原則を欠くのである。

上述の構造内階層性に関連して、類型の階層最上位を占めるつまり構造的支配要素を構成するのは語彙レベルであるから、語彙の構造化原理を解明することこそ類型学にとっての最重要課題であり、なかんずく動詞語の構造化原理の解明が核心であるはずである。このことに関して、クリモフは次のように述べる：言語類型を構成する構造的「諸特徴の大部分は、関係文法の分野の西欧の文献でコード化特性（*coding properties*）として知られる諸特徴の総和を構成し、それに対置していわゆるコントロール特性（*control properties*）の諸特徴が示される。言語類型のコード化手法を構成する諸要素

の一定の内的階層性を示す原則がある。この場合、ここで構造的支配要素の役割を以て任ずるのは、その類型に特徴的な、語彙の構造化原理である。少なくとも最も研究が進んだ言語類型－主格型、能格型、活格型類型－の研究の実際は、そうした主導的役割を担うのはこれら諸類型に機能する動詞語の語彙化原理である、ことを証明している」[Климов, 1983(2009), 84.]。この種の結論は、内容類型学に関わる多くの研究者等が実践的に蓄積してきた公理であろう。例えば 1930 年代のブイホフスカヤ(С.Л.Быховская)⁴⁰や 60 年代のチコバヴァ(А.С.Чикобава)等も、能格諸言語の文構造における動詞語彙素の規定的役割というテーゼを定式化している⁴¹。活格型言語の場合も同じく、動詞述語の語彙の性質と構文と文成分の然るべき形式化には同様の構造的依存関係が存在する[クリモフ, 1999, 65-107.]⁴²。「言語の様々な構造レベル間の階層的依存関係性の同じ様な傾向が内容類型学構想の範囲内で析出できる他の言語諸類型をも特徴づけることは、明らかである。ところが、特に動詞の語彙化原理の研究が今日に至るも実質的に未完の類別諸言語の研究においては、相変らずその文法構造にとっての名詞の語彙化原理(独特の名詞分類法)の基幹的有意義性が強調されている」[Климов, 1983(2009), 85-86.]。一方、キブリクは、「述語の項の中で最も重要なのは、述語の意味的結合価に相当するものである」[Кибрик, 1992, 184.]；「共演項は当該述語の意味的結合価を埋める」ものの[Кибрик, 1992, 200.]として、項が動詞結合価の反映である、すなわち動詞結合価こそ項の態様の決定することを認める一方で、中心(中核)項 core argument(周辺項 *circonstant* に対する)について、「ホッパーやトンプソンの他動性の段階性概念の観点からして、正に中心項こそ、述語の他動性程度を決定づける」[Кибрик, 2003, 131.]と述べる。動詞の結合価こそが項を決定づけるという定式化と中心項こそ他動性程度を決定づけるという定式化は矛盾する。加えて、もしキブリクの関係類型学が、諸類型間の

⁴⁰ See: С.Л.Быховская, К вопросу о трансформации языка. – Докл. АН СССР. Сер. В., 1931, №1, с.6; ejusdem. «Пассивная» конструкция в яфетических языках. – В кн.: Язык и мышление, вып. II. Л., 1934, с.70-72: 「文の統語法と文成分の形態形成の類型的特徴が動詞述語の性質に規定される」。

⁴¹ А.С.Чикобава, Проблема эргативной конструкции в иберийско-кавказских языках(основные вопросы и описательного анализа). – В кн.: Эргативная конструкция предложения в языках различных типов. Л., 1967, с.12: 「名詞形の特性には、他動詞の特性が現れる。したがって、能格構文の問題は、結局は、それら諸言語の他動詞の問題に帰着する。能格構文論は他動詞論であり、他動詞の特徴の理論である。能格の本質の解釈は、他動詞の性質のあれこれの理解に結び付くはずである」。ここで便宜的に使われる「他動詞」というタームは主格(対格)言語におけるそれとは別の概念であって、当時の研究段階を反映した用語法である。

⁴² Г.А.Климов, Типология языков активного строя. 1977, с.80-130. Изд.2. М.: Книжный дом «ЛИБРОКОМ»/ URSS, 2009 – [訳者]クリモフ著(拙訳)『新しい言語類型学－活格構造言語とは何か』, 三省堂, 1999, p.65-107. (第3章 共時態における活格構造、語彙)。

動詞の構造化原理の差異について十分承知の上で他動性というタームを便宜的に使っているとしても、項の役割的意味のハイパーロール的拡張が他動性程度の差異にどのように連動、連係して行くのかという、項と動詞述語という両変数の体系的相関関係を明示すべきであるが、キブリクの関係類型学はそれについては黙している。こうした相関関係の無視は関係類型学一般においても同様である。内容類型学は、少なくとも活格、能格、主格言語それぞれの動詞の構造化原理と名詞項との相関関係を明らかにしている (cf. 最も概略的には上の図表)。

まず、活格言語の語彙化原理はどうか。内容類型学は、活格言語が、活性と生活環の有無によって名詞を活性類 (人間、動物、樹木、植物の名称、例えば、女、母、子ども、犬、鹿、紅松等) と不活性類 (それ以外の事物、現象の名称、例えば島、海、岩、毛皮、家、鼻等) に分類すること、それに呼応して同じく活性～不活性基準によって動詞を活格動詞 (活性類指示対象が行う行為、運動、事象、例えば、生む・生まれる、育つ・育てる、死ぬ、行く、落ちる・倒れる、横たわっている、食べる、飲む、話す、泣く、切る、[雨が]降る、[雷鳴が]轟く等) と状態動詞 (不活格動詞) (不活性類名詞に相関する物理的状态等、例えば、掛る・ぶら下がる、転がる、落ちる・倒れる、突き出ている、尖がっている、湿っている、[風が]吹く、高い、重い、清潔だ、黒い等; 恥ずかしがる、ひもじい、突かれている、知っている、忘れている等) に分類すること、この名詞と動詞の分類は有生名詞～無生名詞、有生動詞～無生動詞の区分にほぼ近似することを明らかにしている (cf. クリモフ, 1999, 第 3, 4 章)。さらに、活格言語類型自体の弁証法的再編の中で、有生～無生原理は活性～不活性原理へと変換しつつ、その変換の波は動詞と名詞の両範疇を含めた構造全体に及んでいくのである (cf. キブリクにおけるハイパーロール的拡張)。したがって、全体として活格動詞と状態動詞の構成は活格型諸言語において一致しているが、活格型内の段階位相によって、「横たわる」、「落ちる」や「死ぬ」、「殺す」等の帰属が異なる場合も見られる他、不随意的行為・状態動詞 (見える、聞こえる、欲する・欲しい、ある、気がする・と思われる等) を分離する段階の活格言語も見られる。注意すべきは、活格構造言語の「動詞語」の特徴的な語彙化手法は、本質的には行為主体の観点も行為客体の観点も含むものではない。…動詞語彙素は…主体・客体的な意味価 (intention) を包摂しておらず、活性 (通常、有生) ないし不活性 (特に、無生) の共演項 (actant) に相関する行為ないしは状態の名づけである」[クリモフ, 1999, 72.]。要するに、活格言語における名詞類と動詞類の呼応は客観的現実の図像的模写であり、初期段階の有生～無生的呼応から基準的な活性～不活性的呼応への変

換は、言語の構造化に次第に主観的要素が介在して来ることを意味している。ところが、関係類型学はアプリアリに主格言語のプリズム越しに活格言語を眺めるから、プロトタイプにさえ「意志」や「制御」要素の有無つまり主観的要素を忍ばせた基準を据えて活格言語を断ずるのである。しかも、相変らず他動詞～自動詞の対立を既定の事実とするから、活格言語とは「自動詞の分裂」言語であると認識するが、この規定は、内容類型学から観れば、歪んだ認識と言わざるを得ない⁴³。他動性～自動性の対立は歴史的なカテゴリーである上に、活格言語の輪郭（プロファイル）は語彙、統語、形態の各階層レベルが一体として連係する構造総体（すなわち体系）として捉えて初めて顕現するのである。活性・不活性原理という動因子（意味的決定因子）に惹起される語彙組織（活格動詞と不活格動詞と活性名詞と不活性名詞の分類）→統語法（活格構文と不活格構文、シンタグマ特徴とその現象化）→形態法（動詞人称接辞系列と活格・不活格の原初的な格萌芽）等々の多数の包含事象（implication）が一体となって一つの全体を形成しつつ、新しい動因子の交替が構造の弁証法的再編を惹起していく。すなわち、その再編は先ずは語彙組織に及び、次いで統語レベルへ、さらに形態レベルへと波及する。繰り返しになるが、その際例えば統語と形態という構造内部間にズレ（矛盾）すなわち「分裂」あるいは「混合」の「類型種」を生じさせるが、やがてはその再編が構造全体に及んで遂には「類型」の交替に至らしめる。この動因子の交替は、一定の意識分野（「言語的思考」）の交替に連係する。これまでの人類史におけるこの動因子の進化過程は、主体・客体的因子の増大過程であった。少なくとも内容類型学はそう考えている。

次に、能格言語の語彙化原理はどうか。名詞には類による区別はなく（類別はそれ以前の段階位相の言語類型の残滓として程度の差こそあれ個々の能格諸言語に観られるが、すでに化石化している、cf. 印欧語の性 gender）、場に応じた、より主体・客体関係に接近した名詞項区分（agentive argument～factitive arg.）が行われる。動詞の語彙化原理については、agentive verbs～factitive verbs の対立が機能している（本稿筆者は、仮にこれに「作因動詞～叙実動詞」という訳語を当てているが、便宜上、能格動詞～絶

⁴³ 例えば、ウィキペディアの解説：「活格言語とは自動詞の唯一の項(S)が、場合によって、他動詞の動作主項(A)と同じように標示されたり、他動詞の被動者項(P)と同じように標示されたりする言語のことである。自動詞の項 S の標示の仕方がその言語に特有の分類に従って変わる。自動詞は一般に、主語が動詞作用に意志あるいは制御を及ぼすことができる動詞（意志動詞、非能格動詞）と、できない動詞（非意志動詞、非対格動詞）に分けることができる（この分類は言語によって異なる）。活格言語では、このような分類に従って格の用い方が異なるわけである」。ディクソンも同じ認識を示す（*R.M.W.Dixon, Ergativity, Cambridge Univ.Press, 1994, p.70-83.*他、クリモフとの関連では特に p.77-78.）。

対動詞と呼称しても問題はない)。この対立は、他動詞・自動詞の対立に一部重なるあるいは一步接近するが、他動詞・自動詞の対立そのものではない点に注意が必要である。すなわち、① 作因動詞(能格動詞)とは、行為が主体から客体に及ぶとき客体を改変・改造(*preobrazovat'* [transform])させてしまう行為を表す動詞であって(例えば、「折る、砕く」、「切る」、「摘み取る、もぎ取る」、「殺す」、「伐採する」、「乾かす」、「捕獲する」、「耕す」、「掘る」、「播種する」、「焚く」、他)、これらの動詞語彙は統語面に反応して能格構文を指定する。② 叙実動詞(絶対動詞)とは、主体の状態を表す動詞、また主体の客体に対する表面的な波及作用(*poverxnostnoje vozdejstviye* [superficial influence])を表す動詞(例えば、「育つ、生えている」、「(歩いて)行く」、「横たわっている」、「走る」、「くしゃみする」、「(泣き)叫ぶ」、「歌う」、「踊る」；「押す、突く」、「打つ、叩く」、「つねる」、「引っ掻く」、「咬みつく」、「接吻する」、「引っ張る」、「待つ」、「頼む」、「追いつく」、「罵る」、「呼ぶ」、他多数)であって[Климов, 1983(2009), 95.]⁴⁴、これらは絶対構文を指定する。一見して明らかなように、叙実動詞(絶対動詞)の中には大量の意味的な他動詞(つまり主格言語における他動詞)が含まれている。しかし、これらの意味的な他動詞は、能格言語では構造的な自動詞つまり絶対動詞として振る舞うから、絶対構文を指定する。例えば、カバルダ語(北西カフカス諸語)：

「彼が(abs)・彼を(erg)・呼ぶ(絶対動詞)」；「彼が(abs)・彼に(erg)・咬みつく(絶対動詞)」

ツァフル語(北東カフカス諸語)：

「父が(abs)・息子に(allative)・追いついた(絶対動詞)」他多数。

⁴⁴ こうした能格動詞と絶対動詞の語彙化原理については、すでにはるか以前からクリモフ以外の多数の研究者(とりわけカフカスの言語研究者)に周知の事実であった[Климов, 1983(2009), 98-101]；cf. カフカス諸語の動詞語彙化原理の詳細は次を参照：『カフカス諸語の類型学』の著者クリモフ自身(アプハズ・アディゲ諸語、カルトヴェリ諸語担当)、またその共著者アレクセイ・エフ(ナフ・ダゲスタン諸語担当)も、カフカス諸語の動詞語彙の例を多数挙げている(Г.А.Климов, М.Е.Алексеев, Типология кавказских языков, 1980(2009), Наука(Либроком), 9-34; 173-192)

ここに現れる補語は主格（絶対格）で表す直接補語（直接目的語）でなく、能格（erg）、向格（allative）等で表される斜格であって、「間接」補語（「間接」目的語）であるから、これらは絶対構文である。また、ここで、能格が斜格として登場していることにも注意が必要である（これについては後述）。一方、叙実動詞（絶対動詞）に属する「走る」、「跳ぶ」、「沈む」、「歩く」等—意味的な自動詞（主格言語における自動詞）—が、その単一名詞項（subject）に主格（絶対格）でなく「能格」を充当することがある：「彼が（erg）・走った（絶対動詞）」、等。これは当然、叙実動詞（絶対動詞）が指定する絶対構文であるが、能格式構文（эргативообразная конструкция [ergative-like const.]) と呼称されることがある。これは能格類型が指定する構文ではなく、活格言語類型におけるかつての活格が名詞の形態面に残滓した場合の便宜的呼称にすぎない（当該類型の組織体系が要求する包含事象 implication ではなく、前段階の包含事象の名残りを反映するいわゆる随件事象[多発事象 frequentalia]である）。それ故、念のために言えば、能格式構文は意志とか制御とかの要素とは無関係である。さらにいえば、能格言語における意味的な他動詞は、絶対動詞（叙実動詞）以外に、能格動詞としても絶対動詞としても機能するいわゆる可変動詞（labile verbs, diffuse verbs, transitive-intransitive verbs）、また情緒動詞（affective verbs）また時に所有動詞といった動詞類にも含まれるため、能格言語における「他動詞」の勢力範囲は、主格言語のそれに比してはるかに小規模であることが判明するのである⁴⁵。可変動詞は、わが国あるいは欧米の類型学のいわゆる「逆受身」（anti-passive）構文を構成することがある。ただし、それは統語的手続きとしての変換というよりむしろ意味役割的な変換であることは、キブリクの上例の通りである。クリモフは「逆受身」に関して次のようにコメントしている：「時に専門書において、能格諸言語の独特の文モデルとしていわゆる逆受身構文が指摘される。この場合、多数の能格言語において、能格構文と並行して、通時的にのみ動機性をもつ随件事象（фреквенталия, frequentalia 多発事象）として現れる、非生産的な拡散動詞類ないしは「可変」動詞類が形成する正に絶対構文（同構文が含み得るのは間接補語だけ）のことを想定しているのであるから、このようなアプローチは、能格性を特徴づける本質を訳もなく増幅させることになる（このことはすでに 1940 年代のカフカース学者等⁴⁶が熟知していたことである）」[Климов, 1983(2009), 102.]。

⁴⁵ Cf. 具体例は『類型学研究』第 2 号（2008）、第 3 号（2011）、類型学研究会；cf. 山口巖『類型学序説』、等を参照。

⁴⁶ A.A.ボカリョフ、「アヴァール語統語法」（A.A.Бокарев, Синтаксис аварского языка,

以上のような事態を勘案すれば、上述の意味での能格構造総体という組織体系全体を見ず、また弁証法的な視点を欠いたままで、他動詞・自動詞を既定の事実として述語の項の「関係」如何によって類型を診断する手法の結論には重大な疑念が浮上してくる。極度に抽象化した A,P,S 項間の基準装置によって切り捨てられたものがあまりにも大きすぎるのではないだろうか。能格型類型の判定も、上述の活格言語の場合と同様、能格構造総体としての判定でなければならない。能格言語の動因子である作因性・叙実性原理による動詞の語彙化原理(作因[能格]動詞と叙実[絶対]動詞等の分類原理)→統語法(能格構文と絶対構文、文成分としての「直接」補語と「間接」補語、シンタグマ特徴等)→形態法(能格系列と絶対格系列動詞人称接辞の分類、能格と絶対格等の名詞格体系等)という一体としての構造総体こそ能格類型の確定基準である。これ等構造体にその階層性に関する再編過程のズレを生じさせていくダイナミズムも上述の活格言語の場合と同様である。

次に、統語テストに関するクリモフの批判である。クリモフは、これが「未完成不完全であり、信頼性を欠く」という評価をもっていた:「言語類型の諸特徴の第二群を構成するのは、類型のいわゆるコントロール特性(control properties)であり、それは類型に実現される変形諸規則の総体として現れる。その内研究の実際において最も広く知られるのは、同一指示(co-referential)名詞の削除(equi NP deletion 同一名詞句削除)、主語繰り上げ(subject-raising)、再帰代名詞化(reflexivization)、他若干の統語テストである。すでにこれらの判定から明らかなように、これらの直接的な任務は、言語のコード化特性の証例が何らかの理由で不完全である場合あるいは両義的である場合に類型学的結論を検証することである。このようなアプローチの例証は、例えばダゲスタン諸語の類型に関するキブリクの諸研究に見られる⁴⁷。…ディクソンは当然のことながら、この点に関連して次のように書く:『チャン(S.Chung)は、ほとんど、その主語は補語節の主語に一致させなければならない少数の動詞ー“can”, “begin”, “must”ーを基礎として、これらの動詞にだけ適用可能な『繰り上げ規則』を発動し、ポリネシア諸語の対格的(すなわち、主格的ークリモフ)統語法を論証する……。これはポリネシア諸語の統語法を類型学的に特徴づけるには不十分な基準である』⁴⁸。同時に、実際上

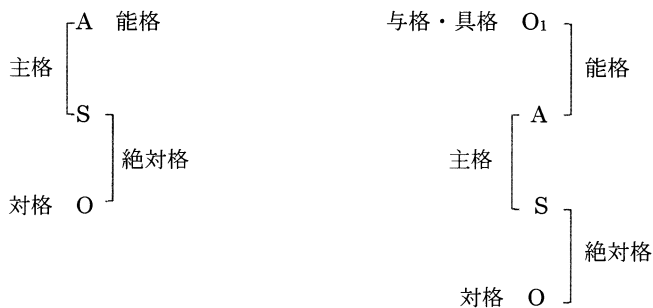
Изв. АН СССР, 1949)

⁴⁷ А.Е.Кибрик, Материалы к типологии эргативности. – В кн.: Проблемная группа по экспериментальной и прикладной лингвистике. Предварительные публикации. 126-130. М., 1979-1980

⁴⁸ R.M.W.Dixon, Ergativity. – Language, 1979, v.55, N1, p.116

上記テストのいくつかは類型学的結論にとって非関与的であることさえ専門書においてすでに再三指摘されているのであるから、そのテストの適用手法そのものは、今後もっと完全化していく必要があると思われる」[Климов, 1983(2009), 86]。

統語テストの基礎にあるピヴォット論に関連して浮上してくる意味的素因子 (semantic primes) の問題でも、関係類型学と内容類型学の認識は異なっている。例えば、下図は能格言語と対格言語の対比におけるディクソンや関係類型学一般の認識であり⁴⁹、右はそれに対するクリモフの修正である[Климов, 1983(2009), 113]⁵⁰：



すなわち能格言語では、 $A + O_1$ (agentive 原理) と $S + O$ (factitive 原理) が対立する。活格言語についても、クリモフは $A + S_1$ (活性原理) と $S_2 + O + O_1$ (不活性原理) の対立を示している (O_1 は間接客体機能を表す；また S_1 と S_2 はそれぞれ、非他動性行為が、ある場合には活性的であり、ある場合には不活性的であることを区別するための記号であるという)。

こうした差異が現れるのは、何故なのか。ディクソンや欧米や我が国の類型論では、能格は常に Agens 専用の格（あるいは主体格）である。しかし、内容類型学は、カフカースの能格諸言語の多くの研究を通じて、能格が間接客体的格機能（与格や具格）を兼務・融合した格であること、すなわち能格の機能には兼務能格と専用能格が存在すること、前者から後者への歴史的シフトの事実を知っていた。1930年代にすでにメッシャニーノフは、兼務能格（北カフカースの諸言語）を専用能格（「ヤペテ諸語」）へ再編して行く過程が、能格組織体系の格パラダイムを主格組織体系の格パラダイムへ変換して

⁴⁹ *Idem*, Ergativity, Cambridge Univ. Press, 1994, p.6, 9. ; ディクソンは P ではなく O を用いるが、ピヴォット論の本質は同じである。Cf. *idem*. 第5章。

⁵⁰ Г.А.Климов, М.Е.Алексеев, Типология кавказских языков, 1980(2009), Наука(Либроком), p.39 ; 山口巖『類型学序説』, p.55.

行くシフトを表すことを見抜いていた[Климов, 1983(2009), 109.]⁵¹。このことはすでに能格が斜格の補語（すなわち「間接」客体格）として機能している上例において明らかであるが、なお若干例を以下に挙げれば：

アディグ語 客 (erg) ・ 若者 (erg) ・ 馬 (abs) ・ 渡した = 客が若者に馬を渡した。
 バツビ語 牧人 (erg) ・ 足 (erg) ・ 蛇 (abs) ・ 殺した = 牧人が足で蛇を殺した。
 アディグ語 若者 (abs) ・ 本 (erg) ・ 触れる = 若者が本に触れる。

こうした認識に差が現れるのは、能格動詞と絶対動詞の語彙化原理とそれに連係する統語法の、つまり能格言語の動因子に連係する、補足項（条件的な意味においてのみ「直接」補語と「間接」補語）の機能原理や体系としての格目録についての認識が、関係類型学と内容類型学では異なるからである。主格や対格が主格（対格）言語の論理から引き出される当然の結果であることは、いまさら説明を必要としない。一方、属格や与格や具格の分離はどうか。内容類型学は、これらの格も主体・客体的原理（主格言語の論理）から発するものであって能格言語の論理からは出て来るものではない、と考えている。上のクリモフの修正図から明らかなように、「能格組織では、対格の機能は絶対格の意味の中に有機的に含まれるから対格を必要としないのと同様に、そこでは与格や具格の機能は能格の意味の中に有機的に組込まれているのだから、これら両格にも収まるべき位置はない…。逆に、主格組織において特に両格を分離させるのは、ここでは直接客体の意味機能も間接客体の意味機能も主体機能とは構造的に分離されるからである」[Климов, 1983(2009), 109.]。「ある格を属格と認定するためには、その限定的機能だけでは不十分であるのと同じように、もう一方のある格を与格と認定するためには、その副詞的（方向的あるいは場所的）機能だけではなお不十分である。与格の生成過程は *dativus adverbialis* [副詞的与格] と並行して *dativus objectivus* [客体の与格] や *dativus subjectivus* [主体の与格] が形成される、言語の構造的再編段階にして初めて確認できるのである。ここに記述した理論的見地は、完全に発達した与格は主格構造の代表言語にのみ立証されるものであり、またこれらの形成の事実は、例えばバスク語やナフ・ダゲスタン諸語にあるように、確実に主格化過程に立ち上った能格言語（そして活格言語？）にのみ特に観察される、という言語的経験事実によっても裏付けることがで

⁵¹ Cf. 拙論「クリモフ著『内容類型学の原理』覚書」—『類型学研究』第2号, 2008, p.79.

きる（能格がその『間接』客体的機能を喪失するという基盤に立って与格が生成されていく過程は、特にナフ・ダゲスタン諸語の資料に基いて示すことができる）。一方の極で『間接』客体的な機能を基盤として与格を分離していくということは、その対極でこの同一の基盤に立って具格を分離していくことを前提とする」[Климов. 1983(2009), 109.]。加えて、ナフ・ダゲスタン諸語では「間接」客体的な機能一般を融合した能格から分離された専用具格が機能する一方、そこには能格も専用具格も具格機能で共存する過渡的な段階も観察されるという[Климов. 1983(2009), 47-48.]。

また、属格の起源が主格と対格の一種の転置である、すなわち「主体の属格」genitivus subjectivus と「客体の属格」genitivus objectivus であることは、すでにクリウオーヴィチやバンヴェニスト他が洞察していたことである。例えば、クリウオーヴィチは、「主体の属格と客体の属格は、属格の他の全ての名詞付接的使用のつまり部分属格や所有属格（二次的機能）の基礎であり、これらは歴史的観点からすれば比較的遅い層を形成する具体的用法である（例えば、印欧諸語において、所有性は主として形容詞が表したことは、周知のところである）。この場合、極めて重要なことは、あらゆる言語において所有属格はこの属格の派生的性格の故に主体と客体の属格を基にし続けていることである」[Климов. 1983(2009), 108.]。バンヴェニストも、① 属格が主体の属格と客体の属格を基礎とすること（主体の属格 *animus partitur* > *patientia animi*、客体の属格 *pati dolorem* > *patientia doloris*）、② この属格が属格的関係一般の「モデル」となる、すなわち、「名詞間の限定的関係図式が定着すると、限定的シンタグマ項の位置は、動詞派生名詞は勿論任意の名詞に波及して行く」ことを指摘している。すなわち *puer ludit* > *ludus pueri*; *puer ridet* > *risus pueri* が *somnus pueri* へ、次いで *mos pueri* へ、そして遂には *liber puer* へ、という拡張過程を辿ることになる⁵²。

それでは、能格類型と属格の関係は如何なるものか。クリモフはこれについても次のように言及する：「属格が、活格構造の言語だけでなく、一貫した能格構造の代表言語においても欠如していることを示す多数の記述面の研究に経験的な裏づけを得たのである。実際、圧倒的多数の能格諸言語において、属格は全く知られていない（cf. アブハズ・アディグ諸語、一連の近西アジアの古語、パプア諸語、オーストラリア諸語、エスキモー・アリュート諸語、アルゴンキン諸語、ツィムシアン・チヌーク、マヤ・キチェ、タ

⁵² Э.Бенвенист, *Общая лингвистика*, 1974(2002), УРСС, стр.163-164 (cf. バンヴェニスト『一般言語学の諸問題』[河村、木下、高塚、花輪、矢島訳], みすず書房, 1983, 1992 があるが、残念ながら当該章 13 章「格機能の分析に向けて：ラテン語属格」“Pour l'analyse des fonctions de casuelles: le génétif latin” は省かれている)。

カナ・パノの諸語他)。あらゆる場合に他の著しい主格性特徴ももつごく少数の能格言語に対してだけ、主体・客体機能の伝達面におけるよく知られた制約性があることを考慮した上で、属格の形成を示すことができる (cf. ナフ・ダゲスタン諸語、バスク語、一部ブルシャスキ語の状況)。とりわけ、ナフ・ダゲスタン諸語では、属格の役割を以て任ずる語尾は *genitivus objectivus* の機能をもたないばかりでなく、*genitivus subjectivus* の機能でも制約性をもちつつ登場する。例えば、ここでは、主体の属格の形は、無生名詞にあつては形成されないことがしばしばである : cf. アヴァール語『石 (*absolutive*)・落ちること (落石)』、ベジタ語『月 (*abs*)・現れること (月の出)』; ツェフル語『春 (*abs*)・来ること (到来)』、ツェフル語における「陽の [*genitive*]・昇ること (日の出)」のような構文形成の可能性は、その意味が有生性の内包的意味 *connotation* を許容するような、少数の無生名詞だけを特徴づけるにすぎない); クルィズ語『焚火 (*abs*)・消えること』。さらに、有生名詞の場合でも、その限定的シンタグマにおける意味的アクセントが行為主体ではなく行為に落ちる場合には、主体の属格は絶対格の形によって置換される : cf. ベジタ語『父 (*abs*)・来ること (到来)』に対する『父の (*gen*)・来ること (到来)』; ラック語『象 (*abs*)・走ること』に対する『象の (*gen*)・走ること』; ツェフル語『母 (*abs*)・出かけること』に対する『母の (*gen*)・出かけること』; タバサラン語『子供 (*abs*)・泣くこと』に対する『子供の (*gen*)・泣くこと』。反対に、主格構造の代表言語にあつては、その多くが有する客体の属格については言うに及ばず、主体の属格機能は如何なる制約もなく登場する (特に印欧諸語、フィン・ウゴル諸語、カルトヴェリ諸語はこうした状況である) [Климов. 1983(2009), 46.]; 「『能格組織の一般的特徴は、属格形は能格組織内では能格と同一だという点である』とするフィルモア (Ch. J. Fillmore) の周知の一般化は、少なくとも正確ではない⁵³ (したがって、むしろ能格が主格組織の属格機能を果たしているというべきであつた)。この一般化は、恐らく、能格諸言語の研究者等の間に過去に大きな広がりを見せていた誤解に基づくものであろうが、これは、すでにはるか以前から専門書において批判されているものである。…能格構造に主格構造の要素を併せもつ諸言語での『属格』や『与格』という用語使用の条件性の程度は各様であると見なすべきである…。いくつかの専門諸研究が示しているように、主格言語的な要素の比重が目立つ能格言語においてすら、例えばナフ・ダゲスタン諸語

⁵³ Cf. チャールズJ.フィルモア (田中晴美、船城道雄訳)『格文法の原理ー言語の意味と構造』, 三省堂, 1975, p.66.

においても、両単位の意味は、先ずは主体・客体関係の分野には関わりのない関係を伝達するのである（この点で注意を引くのは、ダゲスタン諸語の与格は、実質上系列外の所格⁵⁴である、とする E.ボカリョフ [Е. А. Бокарев] の周知の定式化である）[Климов. 1983(2009), 49-50]。こうした能格の融合的意味機能を極度に捨棄し形式化したピヴォット構想が果して能格類型の実像を捕捉できるのか、という疑問は拭い去れない。

内容類型学の基準としての主体・客体的基準の問題。類型学史は、多様な構造化をもつ世界の諸言語を、形態を基準（孤立、膠着、屈折型等）にして対比する形式類型学的手法すなわち「形式から意味へ」というアプローチに対する不満から、次第に「意味（内容）から形式へ」という手法を模索する動きが始まったことを示している。ロシアでは特に 1930 年代から「言語的技法の思想的根拠」を追究する動きが活発化したが、このことをメッシャニーノフは、「言語の形式的側面と思想的（すなわち、内容のークリモフ）側面の研究、…言語構造内での論理範疇と文法範疇の相関関係の問題に特段の注意が向けられた」と総括している[Климов. 1983(2009), 16.]⁵⁵。クリモフは、「意味的因子こそすなわちある意味普遍（概念範疇）の総体こそが、…非常に多様な諸言語の形式的手段を対比するための一定の基準を見出させる。…このような比較基準（ориентир[referense point]）の役割を果すのは、世界の全ての言語において必然的に表現される現実の主体・客体関係である。関係文法の理論も、実質的にはこの関係にこそ起点をおく」[Климов. 1983(2009), 14-15.],あるいはまた、「主体・客体関係こそが、言語構造内にはほとんどその構造レベル全体に及ぶような著しく多岐的な投影組織網を敷く」、つまり主体・客体関係の表現手法の差異こそ言語構造全体を規定する本質であるから、「類型的関与性の点で原理的に重要である」[Климов. 1983(2009), 17.],と述べる。サピアの周知の「誰が誰を殺すのか、という問題は避けられない」という発言も同じ観点からの発言である。これは類型学がある意味では、形態分類を基礎とする形式

⁵⁴ 例えばアヴァール語では四つの各所格（locative, allative, ablative, translative）をさらに細分化した 5 系列（表面、近辺、中、下、中空内）が区別される。同語の記述文法の解説では、主格、能格、属格、与格以外に所格 4 格×5 系列が存在することになるが、諸所格形は斜格語基を基にしており、非空間的な意義も有し、斜格補語、状況語として、また主語としてさえ登場する、とされる。与格とされるものと所格の近接性が浮上する（cf. Б.М.Атаев, Самоучитель аварского языка, Махачкала, 1996 ; М.Е.Алексеев, Аварский язык – Языки мира, Кавказские языки, изд. Academia, 1999）。

⁵⁵ Cf. G.A.クリモフ（拙訳）「ソ連邦における類型学研究（20-40 年代）」（Г.А.Климов, Типологические исследования в СССР (20-40 годы), Наука, 1981, стр.33.）— 科研報告（研究代表者 柳沢民雄）「ロシア・ソヴィエト言語類型論の研究」, 名古屋大学, 2002, p.262 に収録。小冊子ながら、同書は「内容類型学の原理」を読む際に相互的に示唆に富む重要参考文献の一つであると思われる。

類型学から統語面を基礎とする類型学へパラダイム・シフトを遂げたことを表している⁵⁶。ただし、内容類型学のその後の発展は、これが統語レベルだけにとどまる類型学でない（総体系類型学である）ことを示した。一方、関係類型学は主体・客体関係を基礎とするパラダイム・シフトから出発しながら（キブリクも含めて関係類型が基礎とする *Agens* と *Patiens* の対立は、結局は主体・客体関係の対立を基準に据えている）、上述のように基軸項間の関係だけに焦点を絞る方向性を採っている。

しかし、主体・客体関係を基準とするといっても、類型学を構築していく上で、上にいう「ある意味普遍（概念範疇）」を基礎とするか統語レベル（文の成分）を基礎とするかという問題は、一義的な解決が困難な問題には違いない。クリモフは「能格総論概説」（1973）において、能格構造に現れる文成分目録に関して、*Agens*, *Patiens*, *Actor*, *Goal* 等々様々な試みがあることを示した上で、「この問題の難しさを克服するには二つの方向」があり、「一つは、能格論において主語、直接補語等の概念の利用を止め別の用語法に置き換えること、もう一つは、伝統的統語論から継承して来た二つの概念の外延 *объем* を広げること、例えば、主語の中に斜格形ないしは専用の能格形での名詞成分を含めること」を挙げる。その上で、「多くの諸研究」が選択する第二の方向の「メリットは、統語論に伝統的に形成されて来た文成分認識を、用語法を複雑化せずにさらに精査して行くことを保証するという点にある。多数の言語が能格言語から主格言語への過渡的な文類型の特徴をもつのであり、したがって、競合する概念例えば主語あるいは *Agens*、直接補語と *Patiens* の実際の外延は、それら諸言語においてある程度近接しており、この方向の方がより利便性が高い」上に、文における線条の関係、音調的区別、語の形態のような構造的根拠すなわち「主語」にも「直接」補語にも構造的根拠が存在する、と説明している⁵⁷。その上で、例えば、主語グループ（主語・述語）と述語グループ（述語・「直接」補語）の間に引かれる「特徴的な韻律・音調的な輪郭線」の存在や形態（有徴的主語に対する無徴的補語）等の事実から、能格言語における主語の自立性と「直接」補語の述語への従属性、すなわち述語・「直接」補語が第一次シンタグマを形成し、主語はこれに被さる形で第二次シンタグマを形成することも明らかにしている。主格言語では、主語と述語が先ず第一次シンタグマを形成し、それに直接補語が被

⁵⁶ このシフトの意義については、メッシュャニーノフが指摘している（cf. 同上科研報告所収の拙訳, p.262[原著 p.34-35.]）。サビアについては、泉井久之助訳『言語』（紀伊國屋書店, 1964, p.90-91.）、安藤貞雄訳『言語』（岩波文庫, p.159-160.）。

⁵⁷ Г.А.Климов, Очерк общей теории эргативности, 1977, Наука(Либроком, 2009), p.77, cf. p.78-80, 他; cf. 拙論『「能格性総論概説」についての覚書」—『類型学研究』第3号, p.59-61.

さって第二次シンタグマを形成することと対照的である。なお、「活格構造言語の類型学」では、「能格性総論概説」にはなかった動詞結合価と主語の関係に関する考察が加わっている。すなわち、カツネリソン (С.Д.Кацнельсон) に従って、主語とは動詞の「結合価によって決定される文の名詞成分の一つ」であるとする定式化である[クリモフ, 1999, 95]。活格言語に関して、一価述語の場合は当然一価述語に対する単一の「位置的補充」が主語であるのに対して、多価述語の場合は主体・客体の意味価 (intention) が欠ける環境では問題が複雑になるが、基本的には語順 (S[O]V が優勢語順) や形態が (格形式が萌芽あるいは発達してくる段階では活格あるいは不活格が、それが未完成である場合は動詞人称接辞系列が) その決定を助ける。要するに、能格言語であれ活格言語であれ、主体・客体的な意味価認定は、動詞結合価や述語に対する名詞項の配置態様、形態特徴等によって可能である。一方、「内容類型学の原理」では、少なくとも「主語」の定義に関する記述はない、勿論、「内容類型学の発展に決定的な一歩が踏み出されたのは、現実の主体・客体関係 (субъектно-объектные отношения действительности) の様々な伝達方法の中に、言語構造の対比的な記述を構築して行く上での発展的展望があることが明らかになった時点においてであった」[Климов, 1983(2009), 16]、として、内容類型学にとっての主体・客体関係が根幹的な基準であることは繰り返し強調されている⁵⁸。本稿筆者には、クリモフは「主語」問題を論ずるよりも、むしろある類型において主体・客体関係が如何なる名詞語彙素類によって表され、それが動詞語彙素と如何なる連係を示すか、という記述法を用いているように思われる。例えば、「活格構造を簡単に定義すれば、その構造的要素を主体・客体関係の伝達ではなく命題の活性的参与項と不活性的な参与項の間に存する関係の伝達に意を用いるような言語類型である」[クリモフ, 1999, 1]という定式化である。重要なことは、「主語」についての抽象論ではなく、むしろ「誰が誰を殺すのか」という点での具体的・実問題的な問題解決の態度ではないだろうか。松本泰丈氏もサピアの発言を取り上げながら、「文の意味構造 (文の対象的な意味、文のなづける意味) にかかわる主体・客体表現は、どの言語においても、ひとしい重要性をもっているだろう。主語の地位のちがいは、機能構造の面にあらわれてくるのではないだろうか」、と述べておられる⁵⁹。

⁵⁸ 欧米語の subject(ive), object(ive) という用語は、「主語」や「主体」あるいは「補語 (目的語)」や「客体」等、概念範疇も統語範疇も表すが、「現実」という語が限定語として付されるときは、「主体」あるいは「客体」である。「現実」とは「客観的現実」「客観的实在」の意である。

⁵⁹ まつもと ひろたけ「内容類型学と琉球方言—『主体—客体』表現をめぐる—」一科研報

では、活格言語の文成分目録とシンタグマ構成はどうか。クリモフ著「活格構造言語の類型学」(1977)⁶⁰は、活格言語の文構造に最低限必要な文成分は主語と述語が形成する述語的シンタグマだけであり、補語には「近い補語」と「遠い補語」があり得るが、これらは文構造の主成分ではない、と述べる：活格型類型の文類型である活格構文、不活格構文の構成中には「当然補語もあり得るが、その存在は任意のものである。…活格類型と能格類型の言語がシンタグマ構成面で差をもつことは、恐らく活格構造と能格構造の類型的な区別の必要性を裏付ける論拠の一つになり得る」[クリモフ, 1999, 47-48]；活格構文の構造を「近い補語の体裁をとった任意成分をもつ二つのシンタグマー述語的シンタグマ (predicative syntagm) と補完的シンタグマ (completive s.) ーから成るものとして表すことも…難しいことではない。しかし、実態が示しているのは、能格構文とは違って、活格構文において最低限必要なのは一つ、述語的シンタグマ $N_{act}-V_{act}$ …だけである。同時に、近い補語、行為客体ないしは行為が向けられる客体は、活格構文の全く任意の成分である」、と[クリモフ, 1999, 100]。

活格言語の文類型の例を引いておく。人称接辞では、活格系列人称接辞は常に主語に相関し、不活格系列接辞は、状態動詞（不活格動詞）では主語に、活格動詞では近い補語に相当する。例えばトゥピ・（グ）ワラニー語族カマユラ語（南米）：

wararuwijawa moja o-uʔú「犬が・蛇を（蛇に）・o-咬んだ（咬みついた）」（活格構文）

o-wewe「彼が・o-飛ぶ」；wəra o-wewe「鳥が・o-飛ぶ」（活格構文）

i-tə i-wəj「石が・i-重い」（不活格構文）

i-ʔajura i-haku「i-彼の・首は・i-長い」（不活格構文）

この場合、活格系列接辞 o-；不活格系列接辞 Ø[ゼロ]あるいは i-；不活格系列接辞 i- は「首」に対しては有機的所有接辞⁶¹として働く[例文は、クリモフ, 1999, 96, 113；Климов,

告『奄美語研究ノートー内容類型学からみた奄美語方言ー』, 松本泰丈・田畑千秋共編, 2013年3月, 大分大学田畑研究室, p.15.

⁶⁰ Г.А.Климов, Типология языков активного строя, Наука, 1977 (Либроком, 2009)ー邦訳では、『新しい言語類型学ー活格構造言語とは何か』, 三省堂, 1999と改題。

⁶¹ 活格構造言語は属格を欠く。それに代替するのが、有機的所有（非分離所有）と非有機的所有（分離所有）という形態範疇である。同範疇は活格言構造に連係する包含事象

(implication) である。有機的所有は、所有対象に不活格系列接辞（有機的所有接辞）を付加して、所有対象が所有者と有機的一体であること、所有者の一部であることを表す。この

1983(2009), 94 より]。ただし、「活格動詞の構造に最も頻繁に現れるのは、活格系列の人称接辞だけである (cf. a-meʔe『私が・与える・(それを)』, re-meʔe『君が・与える・(それを)』, o-meʔe『彼が・与える・(それを)』)。言語によっては…不活格系列の接辞をもつものもあるが。活格動詞の3人称の主体の形では、活格系列に相当する接辞が欠落しがちで、行為客体を指示する不活格系列の接辞のみを付加する ([グ]ワラニー語 *še-nupā*『(彼が)・私を・打つ』, *nde-nupā*『(彼が)・お前を・打つ』)」[クリモフ, 1999, 112, cf. 110, 113]、という点にも注意が必要である。クリモフはこうした特徴を単人称活用原理と呼び、トゥピ・ワラニー諸語ではこうした単人称活用原理が特徴的で、二重人称活用原理による活格動詞は少数であること、一方、スー諸語 (北米) の活格動詞では単人称活用原理も二重人称活用原理も見られること (ダコタ語 *wa-kaška*「(それを)・私が・縛る」, *ma-ya-kaška*「私を・君が・縛る」, *ma-kaška*「私を・(彼が)・縛る」、等々)、を指摘している[クリモフ, 1999, 113, cf. 110] (ダコタ語では3人称は活格、不活格系列接辞とも $\emptyset$)。なお、不活格系列接辞は近い補語を指示するが、それは直接客体の概念より外延がもっと広く間接客体や運動方向の機能を融合したものである。近い補語以外に遠い補語も存在するが、これは機能的には状況語 (時、場所、行為手段等) に近い。活格構文には近い補語も遠い補語もあり得るが、不活格構文に存在するのは遠い補語だけである。また活格言語ではあらゆる文型で述語が優勢的な地位にあることは、これは能格言語における以上に鮮明であり、その証の一つが述語と主語あるいは近い補語との密接配置と抱合的結合の多発であることも指摘している。

ところで、注目すべきは、活格言語の文構造において最低限必要なシンタグマは $N_{act}+V_{act}$, $N_{inact}+V_{stat}$ である、とするクリモフ定式化である[クリモフ, 1999, 47-48]。しかも、この点が能格言語のシンタグマとの差異であるという。すなわち、初期活格型における[有生名詞+有生動詞]→基準型・後期型における[活性名詞+活格動詞]、一方、[無生名詞+無生動詞]→[不活性名詞+不活格動詞 (状態動詞)]というシンタグマが活格構造の第一次シンタグマである。このことはまた、[多類別名詞 + 多類別動詞]結合の類別言語の後期段階が次第に[有生/無生名詞 + 有生/無生動詞]への移行傾向を示す

所有形をとり得るのは、①人や動物の身体部分の名称、②血縁者の名称、③人、動物に密接に関連する事物、概念の名称 (名前、足跡、影、等)、だけである。例えば、「人の+手」という限定的シンタグマは、「人+不活格系列接辞-手」のように表す。非有機的所有の場合は、所有対象に有機的所有接辞と補助接辞を合成して付加する。例えば、彼の身体部分としての頭でなく「彼の+ (食用の) 頭」では、「所有接辞+補助接辞+頭」のように表す。有機的所有と非有機的所有の形の区別は活性類名詞 (人、動物等) と結ぶ名詞にのみ可能である [cf. クリモフ, 1999, 123-129. 他]。

ことが真であるならば、活格型言語の前段階とされる類別言語のシンタグマ構成の推定の点からも興味深い。何れにせよ、動詞述語への従属度が能格言語以上に高く、述語との抱合的結合が多発するという活格言語の「近い補語」の位置づけは、能格言語の「直接」補語のそれとは質的に異なるのである。さらに活格言語のシンタグマ構成の点から思い浮かぶのは、一つは、クリモフが活格言語と認定する言語を主格言語として記述する研究者が存在すること⁶²、もう一つは、クリモフや印欧学者（ガムクレリゼ Т.В.Гамкрелидзе、イヴァノフ Вяч.Вс.Иванов、デスニツカヤ А.В.Десницкая 他現在では多数派）等の印欧語活格説である。印欧語が活格言語から能格段階を経由せずに主格言語に移行したとする直接的移行説である。もし活格言語の第一次シンタグマが主語＋述語であるとするれば、活格言語からの直接的移行という方向性はごく自然なルートであると考えることができるのではないか。Ju, S. ステパーノフ著「印欧語の文」は、印欧語の発達段階をガムクレリゼ－イヴァノフ期（活格段階、ただし能格現象の混在）→（いくつかの中間段階）→ユレンベック期（活格構造の崩壊期）→主格・対格構造段階（現代印欧諸語）という諸段階に分け、同著が扱うのはユレンベック（Ch. C. Uhlenbeck）期であるとして、その段階にあった最低限の印欧語三文型を挙げている：I. 不活性主体＋不活格動詞、II. 活性主体＋活格動詞、III. 活性主体＋活格動詞＋不活性客体⁶³。ステパーノフが挙げた段階が活格構造の崩壊期に関係することも興味深い（特に III 型）。クリモフは活格構造言語の構造的二分化（能格化と主格化）発展の可能性は経験的事実が裏付けるところであるが、この再編の底流にある因子、前提は何か、と問うている。「活格構造言語の類型学」（1977）においては、その因子が「動詞活用の主として単人称的（主体的）な性格か二重人称的（主体・客体的）な性格である可能性も排除できない」[クリモフ, 1999, 259.], としていたが、「内容類型学の原理」（1983）ではこの推定を修正している。すなわち、この推定は「現象の形式的な特徴に判断を求めるものであるから、内容類型学的な説明の精神そのものに反すると思われる。この問題の正しい解決は…後期活格状態の再編の構造環境全体を研究する中で初めて達成できよう。この面では、後期活格状態の二つの進化（能格化と主格化－石田）のいくつかの結果の研究が一定の関心と呼ぶはずである」[Климов, 1983(2009), 203.]. そこでクリモフが挙げた興味深い着目点は、活格言語に連係する包含事象とし

⁶² 例えば、キブリクはナヴァホ語を主格言語に帰属させる（cf. 本稿 p.126）（А.Е.Кибрик, Константы и переменные языка, Алетейя, Санкт-Петербург, 2003, стр.153-154. → Экскурс 5. Язык Навахо）。

⁶³ Ю.С.Степанов, Индоевропейское предложение, Наука, 1989, стр.11, 12.

ての、いわゆる有機的所有（非分離所有）と非有機的所有（分離所有）⁶⁴と活格動詞の相的ディアテシス（遠心相 *centrigugal version* と求心相 *noncentrigugal version*）という二つの事象の発展動向の相関関係にある。すなわち、後期活格言語ではこの所有範疇が消滅して行く過程が観察されるが、その場合消滅して行くこの所有範疇の関係の表現機能を次第に動詞の相的ディアテシスに移行・代償させていく過程が進行し、さらにこの相的ディアテシスを再解釈して漸次態（voice）的ディアテシスへ変換させて行く過程を辿るのが主格言語であり（cf. 印欧語における能動態と中動態の対立からやがて能動態と受動態の発達へ）、一方、能格言語ではこの相的ディアテシスが弱化衰退し、そのことが当該所有範疇の長期保存を助けるという過程が進行することになる。こうして、能格言語（アブハズ・アディゲ諸語、アルゴンキン諸語、ブルシャスキ語、ポリネシア諸語、等）は有機的所有を残滓的に保存する一方、主格言語（活格言語との接点を残すカルトヴェリ諸語等も含めて）は「原則として」当該所有範疇を消滅させていくのである[Климов, 1983(2009), 203.]⁶⁵。また「他動詞の語形の態的区別を知らない主格言語の一部は、当然、歴史的に能格的状態を体験することになった、と推定できる」[同, 203-204.]。このことは、相的ディアテシスや当該所有範疇の性格を考えれば当然である。遠心相とは「行為が活性行為項の圏内を越えて広がり及ぶことを、非遠心相とは行為が行為項の圏内に閉じこもることを表す」[クリモフ、1999, 118.]。活格構造原理に連係する相的ディアテシスと有機（非分離）的～非有機（分離）的所有範疇の相関性については、実は「内容類型学の原理」以前に、クリモフはすでに「活格構造言語の類型学」においても示唆している：「二種類の所有形を区別するのは、限定的シンタグマ内で活性類名詞とのみ相関する名詞（すなわち、身体部分及び植物の部分の名称、血縁関係用語、人や動物に密接に関係する一聯の事象の名称）である。しかも、是非触れておかなければならないことは、二つの所有形を区別するという事実の中に、遠心的（「分離的」）行為と非遠心的（「非分離的」）行為の形を区別する、活格動詞の機能との一定の対応関係が看取できることである」[クリモフ、1999, 126.]⁶⁶。

⁶⁴ 註 61 を参照。

⁶⁵ Cf. 『類型学研究』第 2 号、拙論, p.102-103.; クリモフ『能格性総論概説』（Очерк общей теории эргативности, Наука, 1977, 244.）では、有機的所有と非有機的所有の区別を残す能格諸言語が図表化されている（同著は邦訳はないが、cf. 『類型学研究』第 3 号, p.98 拙論）。

⁶⁶ この部分の拙訳（『新しい言語類型学—活格構造言語とは何か』, 1999, 三省堂）に重大な誤植を見逃してしまった。この引用文の（ ）内の語句の配置を、「～シンタグマ内で活性類名詞とのみ相関する名詞（ ）～」とすべきところ、「シンタグマ内で活性類名詞（ ）とのみ相関する名詞～」のように置いてしまった。本稿に引用した訳文が正しい。

何れにせよ、活格型からの二方向発展（能格型か主格型への発展）は、正に主体・客体関係の弁証法的発展過程である。述語をなかだちとして主語との結びつきを強めるか、補語との結びつきを強めるかという弁証法である。事象の生起に主体の介在というモメントを置くか、あるいは客観的事象の生起そのものこそ第一義的であるか、という弁証法でもある。その意味で、人類史における言語の構造化過程は正に主体・客体関係の弁証法的過程である。この過程は未完である。印欧語の古層が活格構造であったとすれば、当然スラヴもそのゲノムを継承して来たであろうが、ロシア語史は他のいくつかのスラヴとは異なって恐らく言語外的な諸要因も重なって、述語は次第に主語との関係を薄め主語から離反して行く歴史を記録している。主語＋述語のシンタグマを失って、述語＋補語のシンタグマの強化に向うのである。山口巖氏のいわれる「述語の相対的独立化の強化」過程である⁶⁷。日本語はどうだったのか？好奇心をそそる問題である。

繰り返しになるが、活格構造言語における、[活性（有生）類＋活格（有生）動詞]あるいは[不活性（無生）類名詞＋不活格（無生）動詞（状態動詞）]という並列は客観的現実の図像的模写あるいは反映にすぎない。したがって、ここに「意志」や「制御」などという要素をアプリアリに構想することは、事象の生起に常に主体あるいは主観の介在を構想する、主格言語話者特に欧米言語話者（研究者）の錯覚であり、*qui pro quo* である。活性（有生）or 不活性（無生）名詞項＋述語を構造の最低限必須のシンタグマとする活格構造言語には、このシンタグマを再編・強化していくポテンシャルも、述語内に潜在する述語の説明補完要素たる「近い」or「遠い」補語を再編して述語＋補語のシンタグマの強化へ向うポテンシャルも内在している。前者の場合には主格言語へ、後者の場合は能格言語へ向う。そしてそのポテンシャルの核心にあるのは恐らく動詞 *intention* とその再解釈過程である。またその再解釈過程に随伴して、単なる有生・活性類あるいは無生・不活性類という名詞類別を活格あるいは不活格という文法格へ、さらに活格は能格あるいは主格へ、不活格は絶対格あるいは対格へ連続的に変換して行く再解釈過程が存在すると思われる。活格と不活格という文法格の成立以前には、それらは単に客観的現実の図像的模写・反映にすぎない有生・活性類と無生・不活性類にすぎなかった。語彙の機能的負担が高かったのである。

以上の諸点から、主格言語毎に直接客体格としての対格と他動性の発達程度に異同性があることは、当然の帰結であろう。印欧諸言語における直接客体格（直接補語格）と

⁶⁷ 山口巖『類型学序説』, p.142-157.; cf. 拙著『ロシア語の歴史—歴史統語論』, 2007, ブイーツソリューション, 2-6.

しての対格の形成が歴史的に遅延ないしは現在でも未完成であること（cf. 印欧語の古層では直接客体格としての対格が確立せず、述語の意味を補充する状況・限定格一般であったこと）、一方、能格言語では逆に、主体格としての能格の完成程度が現在でも能格諸言語毎に異なる（cf. 間接客体格機能を兼務する能格と主体格専用の能格の存在）という事実は、正にこのシンタグマ形成の差すなわち弁証法を体現したものである、と本稿筆者は考えている。

最後に、上述を総括する論点としてクリモフの次の欧米類型学批判を引いておく：彼らは、「主格構造は全一的な言語類型と見なすのに対して、他の諸組織体系は言語の個々のレヴェル—実際は形態レヴェルと統語レヴェル—にのみ関わるものと見なすことの方が多い。彼らは、原則として、言語の文法的特性の何がしかの意味的動因子を見ないのであり、これは、恐らく、すでにアメリカの言語学思想の伝統となっている、文法の脱意味的な理解に関連があるろうが、そのため、各ケースに応じて別様に組合さる普遍的な意味役割（すなわち、他動的行為の主体 A、非他動的行為の主体 S、他動的行為の客体 O）の概念を広く使いながらも、同一言語の異なるレヴェルが異なる類型的組織に属する可能性を認定する。例えば、特に、現代の能格性一般論に広く行われている、部分的、『分離的』能格組織の概念を、普通、彼らは、言語の能格的形態と主格的統語法から形成されるものと解釈する（より稀には、論者等は、レヴェルの特徴付けにこれとは逆の相関関係[主格的形態と能格的統語法—石田]の可能性も認める）。同時に目につくのは、アメリカの類型学者等は、原則として、ヨーロッパの研究仲間等の研究が、少なからざる注意をその分析に裂くところの、言語類型の語彙的包含事象を見ないことである（特に、アメリカ・インディアン語学やオセアニア語学の分野の多くの研究では、すでにはるか以前から活性性～状態性特徴による動詞の語彙化原理が明らかになっているにもかかわらず、彼らにあっては、今日に至るも、動詞語彙の、他動詞類と自動詞類への区分が普遍的なものとは見なされている）。能格性問題の諸研究において、彼らの多くは、能格構文が主格組織の受動構文に構造的に近いとする、ヨーロッパでは克服済の考え方を持っているが、主格構造のかつての受動構文が能格構文の起源の基礎にあるかも知れないとする見地がここに広がっているのも、このことによって説明される。全体として、内容類型学の分野におけるアメリカの諸研究は、内容類型学分野の研究の中では最も形式主義的な潮流である。そこで、例えば、St・アンダーソンは…次のように考える。能格組織における形態と統語の相互整合性程度の問題に関連して専門的に検討されて来たオーストラリアのディルバル語（北クイーンズランド）は、言語学者等が異口同音に形態レヴ

ェルにおいても統語レヴェルにおいても能格的だと捉える言語であるが、この言語とは異なって、その他圧倒的多数の形態的に能格諸言語であるものは表層構造面だけで能格的で統語面では主格的だ、というのである。言語構造の体系性という言語学研究についての基本的テーゼに反するこのような結論が、一定の語彙的前提条件にも然るべき形態手段にも特徴規定される統語的文構造の検討に基づかずに（概して、アメリカの論者等の諸研究では、相対する能格構文と絶対構文という概念は見出し難い）、専ら一連の変形テストが示すいわゆる言語のコントロール特性に基づいてなされていること、に注意しておかなければならない。留意しておくべきは、経験的事実にディルバル型の言語がないからといって、それが多少とも全一的な言語類型としての能格構造組織についてのテーゼを揺るがすことにはならない、ことである」[Климов. 1983(2009), 65-66]。

主要諸文献（その他については上記脚注参照）

A.E. Кибрик Очерки по общим и прикладным вопросам языкознания, Изв. Мос. Ун-та. 1992 (*A.E. キブリク* 『言語学の一般的、応用的諸問題概説』)

A.E. Кибрик Константы и переменные языка, Алетейя, 2003
(*A.E. キブリク* 『言語の定数と変数』)

Г.А. Климов Очерк общей теории эргативности, Наука, 1973 (Либроком, 2009)
(cf. 拙稿「『能格性総論概説』についての覚書」—『類型学研究』第3号, 2011.)

Г.А. Климов Типология языков активного строя, Наука, 1977(Либроком, 2009)
(原題「活格構造言語の類型学」)→(クリモフ『新しい言語類型学—活格構造言語とは何か』(拙訳), 1999, 三省堂)

Г.А. Климов, М.Е. Алексеев Типология кавказских языков, Наука, 1980. (Либроком, 2009.) (クリモフ, アレクセイエフ「カフカース諸語の類型学」)

Г.А. Климов Типологические исследования в СССР (20-40 годы), Наука, 1981.
(クリモフ「ソ連邦における類型学研究 (20-40 年代)」(拙訳) 一科研報告 (研究代表者 柳沢民雄)『ロシア・ソヴィエト言語類型論の研究』, 名古屋大学, 2002. に所収)

Г.А. Климов Принципы континентальной типологии, Наука, 1983. (Либроком, 2009.)
(cf. 拙稿「『内容類型学の原理』についての覚書」—『類型学研究』第2号, 2008.)